

平和文化研究 第44集 (2024年)

都市の記憶 XIV 731部隊?なぜ今?

常石 敬一

長崎総合科学大学

長崎平和文化研究所

長崎平和文化研究所は、2022年12月10日（土）14:00～16:00に常石敬一氏の講演会を、Web講演会「都市の記憶 XIV」として開催した。開催にあたって長崎平和文化研究所長である上藁恒太郎は次に示す井川惺亮が監修したチラシを示しながら、常石敬一氏の講演を時宜に適うと意味づけから始めた。

都市の記憶 XIV 731部隊？なぜ今？

常石 敬一 氏 講演会の意味

常石敬一氏が問い続けてこられた731部隊研究の講演会の意味を考えたいと思います。

今、日本では、新聞などの報道によって以下の点が見えてきています：

2022年11月28日に岸田総理大臣が浜田防衛大臣と鈴木財務大臣に対して、2027年度に防衛費とそれを補完する予算を合わせてGDP比2%にするように指示した。2022年度の当初予算はGDP比0.96%のおよそ5兆4,000億円で、2%だとおよそ11兆円。2%という数字には、海上保安庁の予算、企業や大学での研究開発費、公共インフラ、サイバー関連を含み、敵基地攻撃のために、極超音速誘導弾、3,000km飛ぶミサイルなど、10種類以上の長距離ミサイルを同時開発する。自由民主党と公明党の合意では、敵基地攻撃能力をアメリカ合衆国のために使う可能性を排除していない、日本維新の会、国民民主党が敵基地攻撃能力に賛成、立憲民主党も容認を検討する。

日本は恐ろしい国になるものだと思います。「国を守る」との標語の許に、この計画を国会で論議しないまま首相が指示しています。敵基地攻撃の対象は明示しないと、どこを攻撃しても後から弁解して済ませられます。11兆円を、官が、軍だけでなく、産、学を含んで使う考えです。国民による国会議員選挙は当分ありません。

これは、これまでの防衛政策を転換して、敵の基地を攻撃する戦争へと向かう軍事そして国内体制を整えることを意味します。

GDPの2%によって内閣が、731部隊を支えたと同じ、軍学官産共同体を作ることになるのでしょうか。われわれは731部隊（石井機関）を想起すべきです。常石氏は『731部隊全史 石井機関と軍学官産共同体』（高文研）で、「僕が満州七三一部隊について新たにまとめたいと思ったのは二〇一五年に防衛省が大学などの科学研究を補助する制度（安全保障技術研究推進制度）を始めたことがきっかけだった」と言います。731部隊が学術振興会のプロジェクト、また技術院の戦時研究員制度の先駆けとなっている、1932年発足の学振の目的は軍学官産複合体を日本に作ることだったと。

常石氏はしかし、「科学研究の基本は自由と公開だ。この自由は誰もが持っている基本的
人権における自由である。それは研究の経過あるいは結果として、他人の基本的人権を侵害
する自由はないことを意味する。つまり科学の名の下で人を殺傷する自由はない」と述べま
す。

われわれは、国民国家の思考枠を越えて、人類の視点から、今戦争に走る場合ではない、
との思いを新たにすべきです。今戦争をしている場合ではないのは、地球環境の課題を考
えてもそうです。戦争は、人の殺傷だけでなく、大きな環境汚染です。地球の表面に住むし
かない人類全体のつながりを、国民国家の枠に閉じ込めて軍学官産を糾合し、他に向けての
戦争をする方向を止めたいと思います。常石敬一氏による12月10日「731部隊？なぜ今？」
に耳を傾け、一緒に考える必要が今あります。



WEB講演会
主催 長崎平和文化研究所

NAS 長崎総合科学大学
Department of Applied Science

都市の記憶 XIV

長崎平和文化研究所「都市の記憶」講演は、戦争を止める責任ゆえに「長崎」が
世界に意味のある街であると、未来に語り継ぐ歴史、文化、そして平和について
皆さまとともに考えて参ります。

XIV ● 講師： 常石 敬一
神奈川大学名誉教授・元長崎大学教授

731部隊？なぜ今？

2022年 12月10日（土） 14:00～16:00

会場：総合資格学院長崎校 長崎市江戸町センタービル4F
(会場ではマスク着用をお願いします)

● 申込先：
長崎平和文化研究所
E-mail: peace@NIAS.ac.jp
FAX: 095-839-0584
問い合わせTEL: 095-838-4835 (所長室)
095-838-5128 (事務室)

● 申込方法：
①名前
②住所
③自分の E-mail または FAX番号
④参加方法(WEBまたは会場)を明記の上、
左記のE-mailまたはFAX宛てにお申込み下さい。

※ WEB講演です。上記にお申込み後、メールでZoom参加URLを送信します。
できる限りZoomでの参加をお願いします。
オンライン環境がない方は上記の会場での視聴が可能です。



実は、という話から始めさせていただく。常石敬一氏がお亡くなりになられたとの連絡を2023年4月末に、ご子息の常石憲彦氏から伺った。

衷心よりお悔やみ申しあげる。科学研究のあり方を、731部隊研究を土台に考えてこられた大きな星を失った、まことに残念に思う。

実は講演会の日程は、早い時期がいいとの、常石敬一氏のご希望に添って設定した。ご講演の文字起しに手を入れていただく締め切りの後、さらに、人類のためにおこなわれるべき科学研究の原則、自由と公開という常石敬一氏の提唱された根源的でしなやかな考えを共に深める時をもちたいと考えていた。しかし、科学研究の原則についてさらに考えを深め、確立する作業は、われわれに残された。科学研究をおこなう者が、九州だけで拾っても被爆者や水俣病患者を産まないために、どうするべきかは、長崎平和文化研究所の存在意義に関わる。その手懸かりを話された常石敬一氏に深甚の敬意を表して、『平和文化研究 第44集』に講演を掲げる。

本公演日程は、2022年10月21日に「僕の体調を考えると、早めの方が無難かな、とも思っています。『731部隊全史』は僕の研究の集大成で、上菌さんのご依頼が最後の講演かなとも思います」との返事を頂いたところから始まる。

2023年4月28日に、ご子息の常石憲彦から「4月24日の月曜日に、私の父、常石敬一が亡くなりました。最後まで生きる希望を絶やさず、父らしい最後を迎えることが出来たと家族一同思っております。・・・昨年12月10日に開催していただいた講演会が、父にとって最後の講演となりました。『731部隊全史』執筆後は、仕事を受けるつもりはなかったようなのですが、父が研究者・教育者としての人生を歩みだした長崎からの依頼とあり快諾させていただいたようです。本来なら長崎で講演したかったと思いますが、体力も落ちておりましたので残念ながらそれは叶いませんでした。しかし、最後の仕事と位置付けて、件の本を執筆しながら考えていたことをじっくり話すことができ、とても嬉しかったと言っておりました。講演会は、間違いなく父に生きる活力を与えてくれました。そのような機会を父に与えて下さり、誠にありがとうございました」「4月になり、私が手を加えた原稿を、父に確認してもらいながら校正を終わらそうとしたのですが」とのメールを頂戴した。常石敬一氏に講演を嬉しく思っていたこと、最後まで文字起しの校正を常石憲彦氏および奥様の常石美代子氏の手を借りながらされたこと、深謝せずにはいられない。

お読みいただく皆さんに、実はと本稿の経緯を掲げて、ご理解を得るとともに、人類に資する科学研究のあり方を考えるよすがになればと祈念する。

都市の記憶 XIV 731部隊？なぜ今？

12月10日当日に上菌が冒頭で、上記の講演会の意味について説明し、戦争への道が軍備だけの問題ではないと述べ、次のように続けて、始めた。

上菌恒太郎：兵器類だけではなくて、軍学官産による体制をつくり上げ、そのためにお金を使うことが、あたかもいいことのように政治の側から語られている。そういう流れを今、見いだすことができると思います。常石先生が、2015年に防衛省が大学などの科学研究を補助する制度、安全保障技術研究推進制度ができるのを見て、これはいかんと、731部隊に関する全史（『731部隊全史 石井機関と軍学官産共同体、高文研、2022』）をおまとめになった。その状況が今どんどん進んでいる。1932年発足の学振の目的は、日本全体を、研究者を含めて戦争へ向かう体制をつくる場所にあるのではないか、その危機感の中で、今日、常石先生のお話を伺いたいと考えています。そして皆さんと議論を進めたいと思います。

本日の司会として、教育哲学である私よりもと思い、物理学の研究者でいらっしゃる板倉数記先生にお願いしました。板倉先生は高校のときから731部隊の本などお読みになったということです、それなりのご意見があろうかと思えます。司会を板倉先生にお願いします。板倉先生。

板倉数記：ご紹介ありがとうございます。板倉と申します。よろしく申し上げます。今日の司会を務めさせていただきます。早速、よろしいですかね。常石先生、共有をお願いいたします。

常石敬一：こんにちは。常石です。まず、パワーポイントを共有します。

731部隊(石井機関)、なぜ今 —科学の健全な研究環境のために—



東京、ハルビン（平房）、北京、南京、広州（広東）、シンガポール、"Sanders' Report, 1 Nov. 1945"

2022年12月10日 常石敬一

常石：これが表紙になります。最初に僕は今のもうだいぶ前から補聴器を使わないと聞こえません。今も一応イヤホンをしてるんですけども、聞くのに難儀します。マイクを使って質問される場合には、できればマスクを外してマイクに口を近づけてゆっくりお話ししていただくと助かります。早速、始めます。

これが表紙になります， Sanders' Report, ここから取った地図です。SECRET ってますけども， SKETCH MAP SHOWING DISTRIBUTION OF W.P.U, 防疫給水部の分布地図です。1945年11月に米軍が調べ初めて作りました。

これを見ると、今日もタイトルに731部隊（石井機関）とありますけれども。731部隊は、ハルビンの平房に本部がありました。しかし石井機関全体は、今風の言葉だとグローバル企業とでも言いますか、東京の陸軍軍医学校防疫研究室がグローバル本社で、ハルビン、それから北京、南京、広州、シンガポールの4都市に地域本社のような機関が存在しました。つまり全体の本部が東京。各地域にそれぞれの地域本社が、ハルビン、北京、南京、広州、シンガポールにある。ですから、今日お話しするのは731部隊だけではなく、そういう石井機関全体のお話したいと思っています。

はじめに：常石の紹介

- ・ 1973.1.1～1989.3.31 長崎大学教員
「旧日本軍の細菌兵器開発」上&下、『科学朝日』1980年10月&11月
『消えた細菌戦部隊』、海鳴社、1981年5月
『標的・イシイ：731部隊と米軍諜報活動』、大月書店、1984年12月
- ・ 1989.4.1～2014.3.31 神奈川大学教員
『医学者たちの組織犯罪』、朝日新聞社、1994年5月
『七三一部隊』、講談社現代新書、1995年7月
『戦場の疫学』、海鳴社、2005年11月
『結核と日本人：医療政策を検証する』、岩波書店、2011年11月
- ・ 2014.4.1～ 年金生活者
防衛省、安全保障技術研究推進制度、開始、2015年
『731部隊全史』、高文研、2022年2月
『陸軍軍医学校防疫研究報告 解説・総目次<改訂版>』、不二出版、2022年8月

常石 2022.12.10

2

これは自己紹介です。僕は1973年から長崎大学の教員を務めていました。1980年に「旧日本軍の細菌兵器開発」を『科学朝日』という当時あった雑誌に発表しました。それから1981年に海鳴社から『消えた細菌戦部隊』（再販『消えた細菌戦部隊—関東軍第七三一部隊』ちくま文庫、1993）、そして1984年には大月書店から『標的・イシイ：731部隊と米軍諜報活動』を出版しました。

それから1989年の4月1日から神奈川大学の教員となりましたけれども、そこで朝日新聞社、講談社、海鳴社、岩波書店、パワーポイントにお示したようなものを書きました。

それで2014年4月1日から年金生活者になりました。実はこのときに731部隊研究はもういいかなと思いました。核の問題と731部隊の問題、両方をやっていましたが、神奈川大学を定年退職したときに、731部隊の関係の資料の大部分を捨てました。もちろんオリジナルは残しましたが、コピーは全部捨ててしまいました。僕は出身が都立大学の物理だったので、原発を中心とした核の問題をやろうと思っていました。

ところが、のんびり生活と年金生活を始めた翌年、2015年に防衛省が安全保障技術研究推進制度を開始しました。これは科学の軍事動員に繋がっていく、本当にそんなことやっていいのだろうか思わされました。これは、僕が731部隊の研究を始めた心境によく似ていました。

最初に申し上げたように、僕は物理学の出身です。ところが物理学部で勉強しているうちに、高校生時代に思っていた物理学と、実際の研究現場で行われている物理には随分と乖離がありました。どうして科学は、極端に言うと、環境の破壊だとか、核兵器だとか、細菌兵器だとか、人間の生存に対して敵対的になってしまうのだろう。そこをしっかりと見たいと思いました。何故科学、科学者が今こうあるのか、明確にしたいと思った訳です。

僕が高校生のときに知っていた科学者たちは、非常に紳士的で、穏やかで、社会常識を備えた人でしたが、本当にこれが彼らの真の姿なのかどうかを確かめてみたい。どうすればいいのかわからない。人間は危機に追い込まれると本性を暴露するだろうと、考えました。戦前、戦争最中、サイエンティストは何をやっていたか。僕は「旧日本軍の細菌兵器開発」を発表した1980年の少し前に、『ヒトラー政権と科学者たち』という本の翻訳をしました。その際、ヒトラー政権下での科学者たちの振る舞いを見ると、本当に卑劣な人間から素晴らしい人まで、千差万別です。科学者はこうだと十把ひとからげには言えません。その中で僕は、戦争中、日本のサイエンティストたちはどうだったのだろう、それを通じて科学および科学者の真の姿を知りたいと、思うに至りました。この70年代の終わりに『ヒトラー政権と科学者』を翻訳し、それが『旧日本軍の細菌兵器開発』へと繋がった訳です。これが現在に通じる、僕の自己紹介です。

目次：「満州第731部隊」とは何か

1章(1-7) どんな存在・枠組み：場所、規模、設置目的、やったこと.....**原点は1932年**

研究開発のネットワーク

陸軍科学研究所

「同時発見」（パラダイム） 1933年：青陰河東郷部隊&四平街交通中隊

2章(1-7) 指摘されてきた問題・前提：人体実験、国際法違反の細菌攻撃

科学と戦争を考えるために：盾と矛

転機：「北向け南!」、無謀な戦争：無謀な開発計画、人体の兵器化(PX)

3章(1-16) なぜ今：軍学(官産)の癒着(デュアル・ユース)、癒着による学の歪みVS.科学研究(者)

学問（科学）研究の自由と軍事研究：基本的人権：真理探究権

研究の自由、公開：科学研究の楽しさ

学位論文：公開原則、7条但書

次の時代のために

科学の世界は「**ジグソーパズル**」情報公開vs.情報操作

透明性の確保→**信頼**

歴史

常石 2022.12.10

3

次は本日のお話、まず『「満州第731部隊」とは何か』の目次です。1932年を原点として話を進めていきます。また、ここで補足しなくてはならないことがあります。それは、人体実験は必ずしも否定されないこと。しかし、731部隊が行った人体実験は、同意も何にもなしに人を殺すので許されない人体実験なのです。それから国際法違反の細菌攻撃と書いてありますけれども、731部隊が活動した当時、細菌兵器の研究、開発、製造、これは国際法違反ではありませんでした。国際法が禁じていたのは、戦争での使用に留まります。極端にいうと、国内で反体制派にたいして毒ガスを噴霧しても許される。そういう時代でした。

1章で全体的なこと、2章でもう少し具体的なお話します。第3章で、なぜ今このようなことを取り上げるのか、最後に次の時代をどう考えるべきか、お話ししたいと思います。

す。

この(1-7)とか(1-16)とナンバリングがあります，(1-7)と書いてあるのは，1章の1から1章の7まであります。2章の1から2章の7まで，3章の1から3章の16まであります，そういうナンバリングです。では，本題に入ります。

1章-1 731部隊（石井機関ネットワーク）

石井四郎の回想：「陸軍軍医学校に研究室を作り、それから満州ハルビンに（ロックフェラー・インスティテュートを中心に）。又南支に中山大学を中心に、その外、逐次研究室を作って行って、遂に324の研究所を作ったのであります」。(『清野謙次先生記念論文集』、1956年)

「石井機関」関連地図②



●石井機関			▲PX攻撃都市	
都市	名称	設立年月	都市	年月日
東京	陸軍軍医学校防疫研究室	1932年4-8月頃	高安	1940年6月4-7日
平房	関東軍防疫給水部	1936年8月	義島	1940年10月4日、21日
北京	北支那防疫給水部	1940年3月	寧波	1940年10月27日
南京	中支那防疫給水部	1939年4月	宿務	1941年11月4日
広州	南支那防疫給水部	1939年4月	シロ・コラ・ヨロ	1942年8月19-21日
228° 4' -6	南方軍防疫給水部	1942年5月		

●生物兵器攻撃実行および未遂		
都市	年月	備考
ノモンハン	1939年8月	肺炎チフス菌
サイパン島	1944年春	ペスト菌(PX?)

常石 202

石井四郎の回想から。石井四郎は 731 部隊の部隊長です。彼は『清野謙次先生記念論文集』に、このように回想しています。「陸軍軍医学校に研究室を作り、それから満州ハルビンに（ロックフェラー・インスティテュートを中心に）。又南支に中山大学を中心に、その外、逐次研究室を作って行って、遂に 324 の研究所を作ったのであります」。句読点などがおかしいですが、原文どおりです。これは表紙で見た地図とほぼ同じですが、平房、東京、そしてサイパン島の位置関係が分かります。サイパン島は、あとで出てきます。

それから本部があったのは、平房、北京、南京、広州、それからシンガポールで、石井たちが細菌攻撃をしたのが、ノモンハン、農安、常德、衢県、寧波、広信、広豊、玉山です。細菌攻撃をしようとして失敗したのが、サイパン島です。PX とは、ノミの体内にペスト菌を埋め込んだ、ペストノミといわれているものです。それを都市にばらまいたわけです。石井機関のネットワークは、ご覧のように広範囲にわたっていたということです。次に移ります。

1-2 帝国陸軍の研究開発ネットワーク

1919年				1932年			
	36	40	41	36	39	備考	
陸軍技術本部				軍医学校防疫研究室 [§]			
総務部				東郷部隊(背陰河) →			
1部	火砲、銃器、弾薬 →	1部	1部	1研	731部隊(関東軍防疫部) →	関東軍防疫給水部	SS
	測器 →	3部	3部	2研	100部隊(関東軍軍馬防疫廠)	516部隊(関東軍化学部)	SSS
	車両 →		5部	4研			
2部	一般器材(渡河、爆破)→	2部	2部	3研			
	通信器材 →		4部	5研			
陸軍科学研究所				§ 活動開始は4月および8月、ふた通りの記述(『陸軍軍医学校五〇年史』)			
1部	物理関係 →			7研	SS 他に北京・南京・広州・シンガポールに拠点(1-1)		
2部	化学関係 →			6研	SSS 他に526部隊(関東軍化学部練習隊)1942年		
				8研			
				9研*	*登戸研究所		
				10研**	**1942年発足		

常石 2022.12.10

5

陸軍はどのようなネットワークだったのか。陸軍は、第1次世界大戦後すぐの1919年から、陸軍技術本部の1・2部、それから陸軍科学研究所の1・2部が中心となり、それぞれ研究開発を始めました。1936年になると、陸軍技術本部は1, 3, 2部になり、1940年そして1941年になると非常に本格的な研究体制ができます。陸軍、第1陸軍技術本部そして陸軍科学研究所、これは第10研までできます。これが陸軍全体の研究開発のネットワークです。それに対し陸軍軍医学校は、陸軍軍医学校防疫研究室が1932年に設立されますが、4月から8月かどちらかよく分からない。よく分からないのは1936年に出版された『陸軍軍医学校五〇年史』には、わずか4年前のことなのに、防疫研究室が4月から始まったという記述、そして8月から始まったという二通りの記述があります。始まりがよく分からない。いつの間にか始まった、というふうにも読めます。

科学技術の研究を始動させるのは極めて難しい。やっていくうちに噛み合いだして、正式なプロジェクトになったりすることはある。しかし、どこかの段階でしっかりと組織の位置付けを行わないと暴走してしまう。破滅に向かう暴走が、この731部隊で起こったのだと思います。731の前身が平房から50キロぐらい南の背陰河にありました。そこで秘密部隊をつくり、それが1936年に731部隊なり、関東軍防疫給水部となっていく。その後、科学隊もできる。これが帝国陸軍の研究開発ネットワークです。

1-3 1932年—胎動

軍医学校は「**改革**」を迫られていた

- ・ 軍医学校防疫研究室
 - 防研(陸軍軍医学校防疫研究室)
 - コレラ調査(春広州で始まり、夏満州にも)
 - 東郷部隊準備(コレラ調査で満州出張、遠藤参謀着任)
- ・ 軍医学校の外で
 - 満州国建国
 - 日本学術振興会発足

常石 2022.12.10

6

1932年から1933年が731部隊の「原点」となります。その当時、軍医学校は改革を迫られていました。改革という言葉は、今もそうですが、大抵組織の縮小や、見直しを意味します。軍医学校は、普通の大学の医学部があるから要らないのではないかと。一方、海軍軍医学校は、潜水艦だとか船だとか特殊な空間や状況があるので、海軍のほうはそれほど改革を迫られていなかった。陸軍軍医学校は、さらに規模縮小できないかと、改革を迫られ続けていたわけです。軍医学校としては、それを何とか避けたい。そこで1932年の少し前から、医学兵器というのを考えていました。つまり医学兵器を軍医学校でやれば、改革は迫られないだろうという魂胆です。

その矢先、それが1930年頃ですけれども、1932年に石井四郎という軍医が欧米出張から帰国しました。欧米諸国では細菌兵器の研究が盛んである、日本も行わなければならないと石井は呼びかけ、軍医学校防疫研究室が作られます。先ほど申し上げた通り、1932年の4月から8月から始まります。それまでいた軍医学校の学校長たちは、全員石井の提案に乗った訳です。それが改革を乗り切る切り札になる、多分そのように考えたのでしょう。この1932年と前後して他にも色々なことがありまして、1931年にはコレラが広州で始まり、夏に満州にも広がります。このコレラ調査の為、石井たちは満州出張に行き、関東軍の遠藤三郎参謀と相談して、東郷部隊を満州に編成することになりました。

1932年、軍医学校の外側では満州国建国があり、それから日本学術振興会が発足しました。つまりこのときから科学技術は、研究者が自分の個人的な趣味や関心だけで研究するものではなく、国家の特に軍事的な役割を担わされるようになりました。そのためには、1人ではなくて、グループ研究も大事だと考えられるようになりました。そのための多額の予算も付きますというのが、学術振興会です。これが1932年。このスライドで「1932年—胎動」、と書いた理由です。石井にとっても始まりの年でしたし、日本国全体、日本国の科学技術研究にとっても、非常に大きなエポックメイキングな年だったわけです。

1-4 1933年活動開始—同時発見

- ・パラダイム(背陰河東郷部隊&四平街交通中隊)
- ・四平街交通中隊(1-5)
- ・背陰河東郷部隊「雇員及傭人満洲国出張の件」
(C04011698700:アジア歴史資料センターレファレンスコード、
<https://www.jacar.go.jp/>)

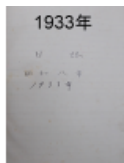
秘 本件ハ医務局ヨリノ希望アルニ付特ニ陸満密受ニテ処理相成度補任課受領番号満普受第三八一四号起元庁(課)名医務局件名雇員及傭人満洲国出張ニ関スル件主務局課番号人進第二〇三号受領昭和八年九月二十五日提出昭和八年九月二十六日大臣官房受領九月二十六日結了十月十一日石井軍医正ニ対シテハ九月二十六日附出張発令セラレヘキニ付本件亦同日附決行相成度補任課大臣官房御中陸満密陸軍軍医学校長へ達案医務局長經由陸軍軍医学校部員陸軍三等軍医正石井四郎満洲国出張ニ付左記ノ者ヲ同官ニ随行セシムヘシ記陸軍軍医学校雇員三名同傭人九名陸満密第四九五号昭和八年九月二十六日

T・クーン『科学革命の構造』 常石 2022.12.10

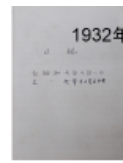
7

「1933年活動開始，同時発見」と書いてあります。トーマス・クーンが『科学革命の構造』で提案したパラダイムの考えの基になったのは、「同時発見」でした。熱の問題を通じて様々な科学者が全く違ったところで、同じようなことを発見する、それが後にパラダイムの基になります。パラダイムで何を言いたいかという、背陰河の東郷部隊、それから四平街の交通中隊、許されない人体実験、それらが「同時」に始まった年が1933年であるという事です。背陰河の東郷部隊については、「雇員及傭人満洲国出張の件」という公文書が実験を裏付けています。このアジア歴史資料センターのレファレンスコード（1-4 中程）を同センターのサイトに入力すると、この書類が出てきます。

書類の中身はこれです。「昭和八年九月二十六日大臣官房・・・石井軍医正ニ対シテハ九月二六日附出張命令」。さらに「陸軍軍医学校部員陸軍三等軍医正石井四郎満洲国出張ニ付・・・」。このようにして、東郷部隊での活動を公文書で、陸軍省として認めていた。東郷部隊は秘密の存在ですけれども、そこでの人体実験も認め、人間の派遣もしていたということです。これが東郷部隊です。



1-5 遠藤三郎日記 (狭山市立博物館)



1933年11月16日(木) 快晴 午前八時半、**安達大佐**、**立花中佐**と共に交通中隊内試験場に行き試験の実情を視察す。

第二班、毒瓦斯、毒液の試験、第一班、電気の試験等にわかれ各xx匪賊2(人)につき実験す。

ホスゲンによる5分間の瓦斯室試験のものは肺炎を起こし重体なるも昨日よりなお、生存しあり。青酸15ミリグラム注射のものは約20分間にて意識を失いたり。

2万ボルト電流による電圧は数回実験せるも死に至らず、最後に注射により殺し第2人目は5千ボルト電流による試験をまた数回に及ぶも死に至らず。最後に連続数分間の電流通過により焼死せしむ。

午後1時半の列車にて帰京す。

夜、塚田大佐と午後11時半まで話し床につきしも安眠し得ず。

「試験出張員に便宜与えられ度件」(C01002926700) 兵器局銃砲課

「次官より関東軍参謀長へ暗号電報来る10月中旬より12月上旬に亘り陸軍科学研究所多田少将以下将校8名下士官判任官16名貴地に出張の上特殊兵器の試験を実施せしめらるるに付可然便宜与へられ度 追て**安達大佐外1名先発の上連絡する筈**昭和8年10月6日」
常石 2022.12.10 8

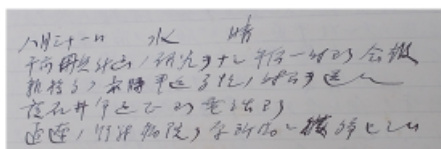
「同時発見」として、四平街の交通中隊で人体実験が行われます。これが「遠藤三郎日記」。1932年の夏から2年ぐらいい関東軍の参謀を務めた遠藤三郎、当時、少佐かな。陸軍中將で敗戦を迎えた遠藤は敗戦後、自分は戦争中間違えていたと言いました。これからは、このような事を繰り返してはいけなと、日中友好や平和運動に取り組み、赤い將軍と呼ばれたりしました。遠藤が、おそらく10代から他界するまで毎日つけていた日記があります。遠藤三郎日記です。

これは日記の1933年11月16日の記述です。「快晴午前八時半、安達大佐、立花中佐と共に交通中隊内試験場に行き試験の実情を視察す」。毒ガスや毒液、それから電気の試験等々行ったとあります。ホスゲンでは「生存しあり」(原文ママ)。「青酸15ミリ注射のものは約20分間にて意識を失いたり」、生きていいのか死んでいるのかは分かりません。特に残忍極まりない記述が、「2万ボルト電流による電圧は数回実験せるも死に至らず、最後に注射により殺し第2人目は5千ボルト電流による試験をまた数回に及ぶも死に至らず。最後に連続数分間の電流通過により焼死せしむ」。この日「午後1時半の列車にて帰京す。夜、塚田大佐と午後11時半まで話し床につきしも安眠し得ず」。これが遠藤の日記から浮かび上がる、33年に交通中隊という四平街の部隊で行われていた人体実験です。

この実験を裏付ける書類が公文書としてあります。「試験出張員に便宜与えられ度件」、兵役局銃砲課。「次官より関東軍参謀長へ暗号電報来る10月中旬より12月上旬に亘り陸軍科学研究所多田少将以下将校8名下士官判任官16名貴地に出張の上特殊兵器の」実験をやる、だから便宜を与えてほしいと、書いてあります。日付は昭和8年10月6日です。つまりこの文章は遠藤が目撃した実験が行われたことを暗示している。1933年になると植民地である満州で731部隊前身の東郷部隊での人体実験も行われた。この事も遠藤日記には書かれ

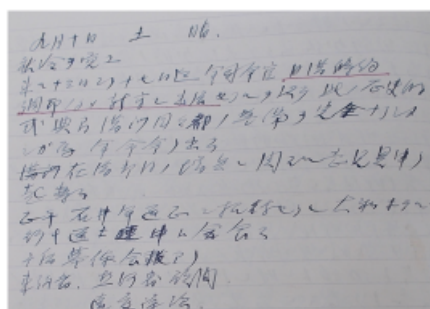
ていますが、これは省略しました。東郷部隊でも、それからこの陸軍科学研究所でも、交通中隊でも陸軍科学研究所の1部と2部がやった人体実験です、1933年に。同じ頃、つまり1933年から東郷部隊も人体実験を本格的に開始します。一連の事を、ここでは「同時発見」と呼んでいます。

1-6 遠藤日記 一石井と連絡&交通中隊

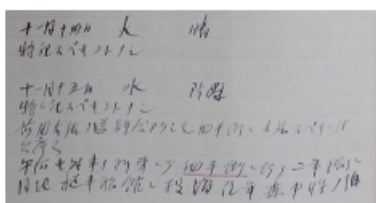


1932年8月31日 水 晴 夜 石井軍
医正より電話あり

9月10日 土 晴 正午石井軍医
正に招待せられ大和ホテルに
行き医士連中と会食す



1933年11月15日 水 降雪 特に記す
べきことなし。前田大佐の送別会
ありし、己四平街に出張すべきに
付欠席す午後7時半の列車にて四平
街に行く2年振りに同地植半旅館に
投宿往年森中将の泊せる宿に入る



常石 2022.12.10

9

遠藤日記をもう少し続けます。これは遠藤の日記の現物です。非常に読みづらく、何人掛かりかで必死に読みました。まず先ほどの1933年の交通中隊に関する記述です。「1933年11月15日水降雪特に記すべきことなし。前田大佐の送別会ありし、己四平街に出張すべきに付欠席す。午後7時半の列車にて四平街に行く2年振りに同地植半旅館に投宿往年森中将の泊せる宿に入る」(原文ママ)。つまり、この同僚の上司の送別会よりもこの四平街で凄惨な人体実験を視察すること、それが遠藤三郎と一緒にいた大佐にとっての仕事だった。参謀にとっても科学研究所や石井部隊での人体実験の視察は重要な公務であったことを物語るエピソードです。つまり、これは石井四郎や陸軍科学研究所の所長が勝手に行っていたのではなく、軍全体として組織的に満州で人体実験をしていたのだという事です。

話は少し戻ります。1932年に満州でコレラが流行し、この調査で石井は満州に出張します。この際、石井は遠藤三郎と打ち合わせて、この東郷部隊の発足の段取りをつけます。そのことを裏付けるのが、遠藤日記です。「1932年8月31日水晴夜石井軍医正より電話あり」。それからほぼ10日後、「土晴正午石井軍医正に招待せられ大和ホテルに行き医士連中と会食す」(原文ママ)。

8月31日から10日と、ほぼ10日空いていますが、石井のコレラ調査のレポートを見ると、この期間、石井は入院したことになっています。しかし僕は、石井は入院したことにし

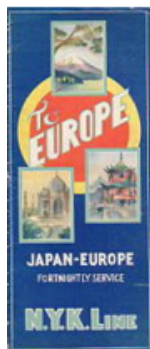
て、遠藤三郎が手配した東郷部隊の活動拠点の視察に行ったのだと思います。秘密部隊ですから、コレラ調査についても報告を書きます。しかし9月1日から9月10日まで、現地で東郷部隊に関する事は書けません。彼はそこで入院したことにした。実際に現地を見て部隊の始動を決心し、この10日になって石井は遠藤を招待して大和ホテルで会食する段取りだった、と推測できます。

1-7 遠藤日記 1928年5月21日 パリ、リヨン駅

5月21日 月曇雨 午前中新聞を読む 正午 Lyon駅に行き
寺田、佐々木、菅波乃大尉、桑名少佐、**斎藤、石井両軍医**を迎へ Hôtel splendide に案内。常盤にて昼食後、銀行其他所々に案内。夕食後 Casino de Parisに案内、12時帰宿す

「陸軍将校海外差遣の件」(C01006107100)

4月9日 横浜出帆諏訪丸：歩兵少佐 桑名卓男・独、**一等軍医** 齊藤勤・独、歩兵大尉 菅波一郎・美、騎兵大尉 佐々木登・ソ連 2年半、航空兵大尉 寺田濟一・ソ連



日本郵船 JAPAN-EUROPE FORTNIGHTLY SERVICE 1928年4月
就航航路：横浜～ロンドン約50日(主要経由地... シンガポール、コロンボ、スエズ、ナポリ)



諏訪丸(三菱長崎造船所、1920年建造) 2代目、6千トン&1万トン

宮武剛、『将軍の遺言—遠藤三郎日記』、毎日新聞社、1986年4月

川村一之、『七三一部隊 1931—細菌戦への道程—』不二出版、2022年12月

常石 2022.12.10

10

実は石井と遠藤は古くからの付き合いがあります。ここで、少し余分な話をします。遠藤の、1928年5月21日の日記です。彼はその当時パリの、おそらく陸軍大学で学んでいました。「5月21日月曇雨午前中新聞を読む正午 Lyon 駅に行き寺田、佐々木、菅波乃大尉、桑名少佐」。これでどう違うかということ、歩兵少佐とか、歩兵大尉とか、騎兵隊、航空兵隊、これはみんな分かりますが、「斎藤、石井両軍医」。ここ(1-7 中)では「一等軍医齊藤勤」と書いてあります。つまり軍医は1段低かったんです。1等軍医というのは、大尉相当です。ですけどもこの当時は軍医大尉って呼ばれないで1等軍医です。これも全然、差別がある。

「迎へ Hôtel splendide に案内。常盤にて昼食後、銀行其他所々に案内。夕食後 Casino de Paris に案内、12時帰宿す」。次に見ていただくのが「陸軍将校海外差遣の件」、公文書です。これは中身になりますあ「4月9日横浜出帆諏訪丸」にこの人たちが乗って行く、と書かれています。この公文書に載っているのは5名ですけれども、遠藤が実際に迎えた人数はおそらく6名です。つまり、この公式の出張書類に石井の名前がない。石井はこの当時ビザなどをどのように取ったのか分かりませんが、少なくともこの公式の陸軍将校海外派遣リストに、彼は載っていません。石井の次の部隊長となった北野政次は、石井は自分勝手に出張に

行き、後になってから公式の出張になったと言っていますが、この二つの資料の相違点はそれを裏付けているのかもしれない。

もう一度、繰り返します。これは遠藤日記（1-7上）、これは公文書の記述（1-7中）です。リヨン駅は、マルセイユ等へ行く列車の発着駅です。この諏訪丸、初代の諏訪丸は沈没しましたが、2代目の諏訪丸は1920年に三菱長崎造船所で造られます。重さだけの純トン数が6000トン、全体の公称の総トン数が1万トン。日本郵船の船で、図の下がそのときの案内です。1928年4月当時は、横浜、ロンドン約50日、主要経由地がシンガポールなどで、経路からするとナポリの次がマルセイユです。マルセイユで彼らは降りて、列車でリヨン駅に向かった。リヨン駅に昼ごろ到着して、そこに遠藤が迎えに来た、という行程でした。

遠藤日記は、最初に、宮武剛が『将軍の遺言—遠藤三郎日記』として明らかにしました。それから最近、もうすぐ出版されるはずですが、川村一之が『七三一部隊 1931—細菌戦への道程—』でおそらくこの記述を紹介されると思います。それまで交通中隊がどこにあるか不明でしたが、この遠藤日記で明らかになった。それから、前年1927年の8月から9月にかけて、このような石井と遠藤の往復があったとことを、川村さんは示されることでしょう。これは川村さんが見つけた日記なので、そこで明らかにされると思います。

これで第1章の終わりです。ここまでで何か質問がありましたら、ぜひ質問を受けたいと思います。いかがでしょうか。特になければ先にいきますけれども。

板倉：何か質問ありますでしょうか。会場の方。

常石：ネットでやってる方は、大丈夫ですか。

板倉：今、伺いましたが、どなたもまだ手を挙げていらっしゃる方いらっしゃいませんので。

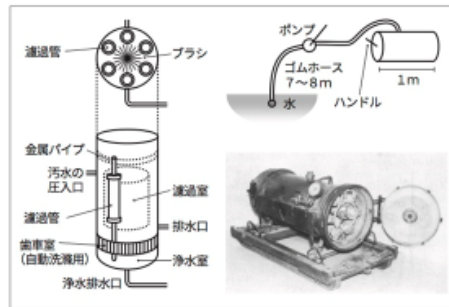
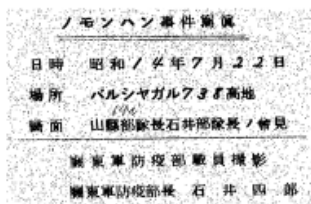
常石：分かりました。

板倉：お願いします。

2章-1 石井の売り込みの武器(盾と矛)



「山縣部隊長石井部隊長の会見 昭和14年7月22日」、C13010543600



矛・細菌兵器：1939年ノモンハン戦争末期
盾・濾水機：陸軍記念日(1933年3月10日)の天覧品、38年7月制式化

常石 2022.12.10

常石：2章へ移ります。2章は1932年に石井が軍医学校に防疫研究室をつくり上げたときから始まります。石井は、武器を売り込みます。武器の1つが細菌兵器，それからもう一つが濾水機。つまり，石井が考えていた細菌兵器は，主に赤痢菌や大腸菌のような，消化器系の病原体でした。すると，汚れた水をくみ取ってきれいな水を出すこの濾水機で，大腸菌や赤痢菌はブロックできるだろうと。自分たちは細菌兵器を持っている。濾水機を持っている。だから細菌兵器を使える。そういう考え方です。この濾水機は素晴らしい性能で，細菌を全部ろ過するというので，1933年3月11日の陸軍記念日に天皇が軍医学校を視察に来るのですが，その際为天覧品になります。その後に行われた海軍大演習の御召艦でも，この濾水機が登場します。この濾水機があれば，細菌をばらまいても大丈夫だというデモンストレーションですね。

ノモンハン戦争の末期に，細菌をばらまいた可能性があります。これがその当時の山縣部隊長と石井部隊長の会見を写した写真です(2章-1)。これもアジア資料センターのもので，ノモンハン事件写真帖。石井ってこんな感じの人ですよというのに使いました。

1932年から始めて1936年に防疫部ができ，さらにノモンハン事件で細菌兵器を使い，そして防疫部だったものが防疫給水部になります。1936年は関東軍防疫部でした。ノモンハン戦争の直後に，関東軍防疫給水部となります。ノモンハン戦争の少し前には，この北京，南京，広州，そしてシンガポールは1942年以降ですけども。北京から広州が全部，北支那防疫給水部，それ中支那防疫給水部，南支那防疫給水部になります。

防疫部と防疫給水部の違いは何かというと，防疫部のままだと部隊員の数が1000人に達しません。研究者やごく一部の人間で，数百人規模です。ところが，防疫給水部になると，

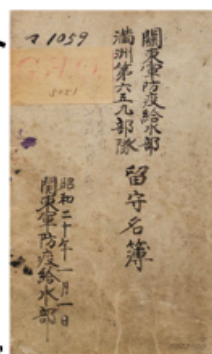
初めて衛生兵が配属されます。そうして731部隊は数百人規模から1500人規模程度になります。敗戦時には3000人ぐらいになります。

ですから、1932年に活動を開始して、1936年に関東軍防疫部として正式発足して、それが1939年には関東軍防疫給水部として衛生兵を抱えた大規模な組織になり、非常に順調に石井のプロジェクトは発展していったわけです。

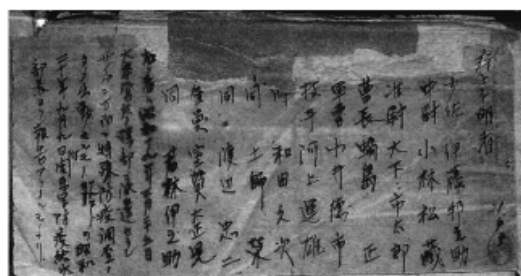
2-2 「北向け南！」の大号令 転機：1941年12月8日

- ・ 浙贛作戦(1942年)での失態
 - 矛盾が露呈、ウソが暴露
- ・ ペストノミ(PX)への転身
- ・ サイパン攻撃未遂

国立公文書館



「右の者は昭和十九年三月二十五日大本営参謀部に派遣せられサイパン方面に特殊防疫調査のため出勤せしものなるもの昭和二十年九月九日附関東軍防疫給水部長より報告ありたるものなり」
関東軍防疫給水部、留守名簿(南方)関東軍防疫給水部 サイパン島



常石 2022.12.10

12

それが、行き過ぎたか、さっき申し上げた陸軍衛生兵として731部隊に加わった衛生兵が話しています。1941年12月8日は、日本は敗戦への道を突き進んでいった最初の日となりました。ちょうど一昨日が日米開戦記念日でしたね。日本が連合国と戦争すると聞き、応召で招集されて、衛生兵として731部隊に加わった京都出身の兵隊が『北向け南！』の大号令だと言いました。それまで敵国と言えどソ連だった。北に向けて様々なことをしましたが、12月8日になり突如として、敵はソ連ではなくて米国だ、南だ、となった訳です。『北向け南！』の大号令」と彼は言いました。

この開戦は「浙贛作戦での失態」を誘発します。東京大空襲が始まるわけですね。その際硫黄島から飛び立った米軍機は日本を爆撃した後、中国南京の近くの飛行場へ向かう訳です。ですから、出撃拠点は航空母艦だと思いますが、帰り着く港、空港を破壊して、本土大空襲を阻止しようと考えたわけです。南京の近くの浙贛地域にいくつか飛行場があり、そこで日本軍は作戦を展開します。飛行場を壊そうというわけです。それで、大軍を浙贛地域に派遣する。そして部隊が撤退した後に大量の細菌をばらまけば、敵は追いかけることが出来ないということで731部隊が動員されました。ところが連絡が不十分だったようで、日本兵が撤退する前にまいてしまう。汚染した地域に日本兵が侵入し、1万人以上が赤痢やコレラ

に感染し1700人が死亡します。

これで「矛盾が露呈，ウソが暴露」。何かというと，コレラ，赤痢，腸チフス等は，全て消化器系の病原体です。それは石井式濾水機で守られるはずでした。ところが1万人以上もが病気になるのは，濾水機が盾の役割を果たしていない，守ることができない矛盾が露呈した。うそが暴露したと。ここで考えることがもう一つあります。それは，消化器系の細菌では感染をコントロールできないという点です。本来は対中国を想定していたものを，日本兵に使ってしまった。さらに感染をコントロールするにはどうすべきかを考えて，行き着いたのがペストノミ。ノミの体内にペストを入れてそのノミをばらまくという新しい戦法です。これは後の第3章で，見ていきます。すぐにうまくいくだろうと，これを使ってサイパン攻撃を企てますが，失敗に終わります

これ(2-2の右上)が公文書館にある「関東軍防疫給水部，留守名簿」です。昭和20年1月1日，関東軍防疫給水部と書いてある。筑波の国立公文書館にあります。非常に読みづらいんですけども，この部分(2-2の下)にはこのように書いてある。「右の者は昭和十九年三月二十五日大本営参謀部に派遣せられサイパン方面に特殊防疫調査のため出動せしものなるものの昭和二十年九月九日附関東軍防疫給水部長より報告ありたるものなり」。要するに帰ってきません，ということです。このときの部隊長は少佐伊藤邦之助，曹長として蛸島正と書いてある。

実は，このサイパン攻撃について，僕は1982～1983年に関係者複数人から聞き取り調査を行いました。当時薬剤将校だった人から，このサイパン攻撃は伊藤邦之助とイワサキ(名不明)という2人の京都大学出身の佐官がリーダーとなりサイパンに派遣されたと，自分はイワサキ，伊藤の送別会に出たから知っている，話を聞きました。しかし彼らは帰ってこなかったとも証言しました。もう一つは，北海道出身の准尉で，彼はこの蛸島という人物がいて，確か函館出身で同郷のよしみで送別会をやったと。ですから，1981年から1983年にかけて，全く違う人たちからこのような話を聞き，サイパン攻撃は事実だと思っていました。

ところが，7，8年前にこの留守名簿が公開され，そこで伊藤，蛸島の名前を発見できた。この名簿ですが，昔は公開されていたのですが，プライバシー等の問題があり過去20年間程公開されていませんでした。それが近年，公文書のアーキビストの数がそろってきたのか，プライバシーを侵害する部分は墨塗りなどをして公開することが進んでいます。それで次のような事を言えるようになりました。つまり「北向け南」の1年後に「浙贛作戦での失態」それからさらに3年後にはサイパン攻撃未遂，という一連の事件が明らかになったわけです。

2-3 人体実験：米露の文書



このような中、人体実験が進んでいきます。人体実験は絵空事ではなく、人体実験を裏付ける文書が少なくとも米国(2-3左)、旧ソ連(2-3右)にあります。日本国内でも探せばあります。丁寧に読めば日本語でも分かります。これを「米露の文書」としたのは、日本による人体実験は世界的に知られている為、人体実験はなかったと言うのは、日本的には恥ずかしい話ではないかという意思表示です。それで、こんな報告があります、と示しました。

これらは、2005年6月、1990年12月に、それぞれ僕が写した写真です。人からの借り物ではありません。1990年は、ロシアにとって非常に良い時代でした。ベルリンの壁が崩壊し、自由がみなぎっていた時代です。だからこのような資料にも非常に楽にアクセスできました。それが今どうなっているのか、今はロシアなど行きたくないですが、このときは良い時代でした。これらの資料は、英国の公文書館にもあります。

2-4 感染力増強 誤った前提：動物体通過

当時17歳の少年、鎌田信雄が39年7月から所属した高橋(ペスト)班での作業は、部隊に囚われている人にペスト菌を接種し、一定期間後全採血していた。彼はこの目的を「濃度を高めて純培養をしてより強い、より殺傷力のあるペスト菌を育てる」と教えられていた(鎌田信雄証言)。2-6「人体の兵器化」

「細菌戦に使用するためには、なるべく長期にわたって菌力をおとさずに保存する方法と、よりよく乾燥に耐える強力な菌をつくる必要がある。そのため、人体に培養菌を注射して、脾臓や血液を材料にとり、さらにそれを培養してまた注射するといった実験が行われていた。すなわち頻繁に『動物体通過』をくりかえして人間の抵抗力に慣れさせた強力な菌をつくりだすわけだ」(秋山浩『特殊部隊七三一』、pp.96-7)

「死んだ時点ですぐ解剖し、要所要所を各班がとるわけですね、そしてそれを純粋培養してより強力な菌を得る。それをもう1回繰り返すと大幅アップ。それを私はやってきたんですから……私はそういう過程の中で初めは非常になんと言いますか、人間としての心の痛みと言いますか、非常に耐えられんものがありました。しかし毎日繰り返してやっております段階で……」(小幡(松田)石男証言)

常石 2022.12.10

14

少々話が前後しますが、胎動(1-3)、コレラ調査、石井たちのコレラ調査(1-4, 1-5)、これが石井たちの活動の原点になります。どのようなことかと言うと、現地でコレラ菌を沢山集めてくるわけです。ハルビン、新疆、瀋陽、と色々な場所です。満州だけで40程の都市でコレラ菌を集めてきます。これらのコレラ菌の振る舞いをずっと調べて分かったことは、すごく感染力が強いコレラ菌でも、実験室で1週間、数週間、1カ月、数カ月保管すると、どんなに努力しても感染力が落ちてしまうということです。ではどうすればいいのか。

その当時、各国で行っていたのは動物通過法です。例えばコレラであれば、ネズミ等の動物の体内を通す。それにより感染力を回復させるようなことを行っていました。「誤った前提」と書いてありますが(2-4)、例えばコレラ菌をネズミに注射し、コレラに感染したら、そこからコレラ菌を取り出す。そうすると最初のコレラ菌の強力な感染力は回復していると、研究結果は出ました。これは後から見ると間違いなのですが、当時の世界的な医学の常識からすると、それ程的外れではなかった。多くの人、多くの国でそのように思われていました。実際に実験を、その実験のやり方がいい悪いは別にして、石井とその弟子や部下たちが実行しました。軍医学校で行ったコレラ菌の実験からすると、確かに動物の体内を通すと低下した感染力がアップしています。それで、動物体通過を始めたわけです。

鎌田信雄は17歳で731部隊に行き、高橋班に所属しました。それから秋山浩は、敗戦の年の夏、5月ぐらいだと思いますが、731部隊へ行きました。それから、1943年ぐらいから衛生兵として部隊に招集されて、最後の年はおそらく伍長まで出世しました。この二人がそろって同じことを言っています。

何を言っているかということ。「部隊に囚われている人にペスト菌を接種し、一定期間後全採血していた」。これを読むと「人体に培養菌を注射して、脾臓や血液を材料にとり、さらにそれを培養してまた注射するといった実験が行われていた。すなわち頻繁に『動物体通過』を繰り返して人間の抵抗力に慣れきった強力な菌をつくりだすわけだ」。小幡が「死んだ時点ですぐ解剖し」、「それを純粋培養してより強力な菌を得る。それをもう1回繰り返すと大幅アップ。それを私はやってきた」。「非常に耐えられんものがありました。しかし毎日繰り返してやっております段階で慣れたことを非常に悲しんでいます。」

同じようなこと、とらわれた人に病原体を摂取して、そしてその人の体の中で病原体が増えた頃に血を全部採る。証言は全て、そのような人体事件を物語っています。時代が違ふところで、同じ731部隊でも行っていました。同じことを姉妹部隊の南京の1644部隊でもやっていたと、マツモトは証言しています。ですから、石井機関にとって、人間に病原体を摂取して、そこからより強力になったであろう菌を取り出す。これはもう感染力増強に基本の考えだったと思います。それは、誤った前提だった。小幡には、非常に耐えられないものがありました。

この人体実験を遂行していたのは全て、少なくともこの秋山と鎌田は高橋班でやりました。高橋は、敗戦後帝銀事件が起きた際に、帝銀捜査陣の尋問を事件から3カ月程たって受けます。そのとき高橋は色々と部隊の中身、誰はひどい人物だとか誰が健康診断をやっていて等を話しますが、高橋自身はコレラ班にいたと話しています。おそらく、この小幡の証言からすると、いかに自分がペスト班で大変なことをしたか、これだけはどうしてもしゃべれないということではないかと、帝銀事件の捜査日記から読み取ることが可能かもしれません。班長ですらしゃべることができない。だからそれを話してくれた小幡たちに、僕は非常に感謝しています。

1人だけだったら確実だとは言えませんが、鎌田は1939年から、秋山と小幡は、其々1945年から1948年ぐらい、1945年の5月から夏にかけて、それから場所が違って南京でも同じようなことやっていたと。マツモトが証言している石井機関では、感染力増強の誤った前提として、動物体通過はどこでも行われていたと考えるべきだろうと、僕は思っています。

2-5 人体実験：PX開発

ペストの潜伏期間は短い(WHOによれば1日から7日)。ペスト発病初期は血液への菌の出現は限定的で、人体に侵入したペスト菌が増えピークとなるのは典型的なペストの症状を示すころだが、ペストは発病後12時間～24時間で死亡する。人から十分な量の菌を得るには菌接種直後から観察を続け、菌を採る最適のタイミングで血液や臓器から菌を集める必要があった。石井機関では「**ペストに人為的感染・死亡例の大部分で死の3日前に肺炎を発症し、それに続いて高い感染力を示す**」ことをつかんでいた。

Plague, WHO, 31 October 2017, <http://www.who.int/en/news-room/fact-sheets/detail/plague>、ペストの病原体検査・診断マニュアル、国立感染症研究所、https://www.niid.go.jp/niid/images/lab-manual/plague_2011.pdf
Brief Summary of New Information about Japanese B.W. Activities, 20 June 1947, Norbert H. Fell
4. A brief summary of the many details given in the 60-page report on B.W. activities directed against man is as follows (Unless otherwise mentioned all of the data given herein refer to experiments on humans).

流行性出血熱：「流行性出血熱の病原体の決定」『日本病理学会会誌』、34巻、1944年、pp.3-5、北野政次2代目部隊長の論文
発熱極期に剖検すれば……唯腎は肉眼的に充血を認めるだけである。然しかゝる時期の腎・肝・脾こそ感染力は絶大なのである……多くの研究者によって主要流行例毎に病原検索が実施せられたのであるが、検索材料の不適當、例えば極期後の血液或は病毒の既に消失した臓器をめあてとしていたゝめ遂に病原を確定することが出来なかつたのであろう

「人体実験」。まずさっき言いました、PX。ノミの体内にペスト菌を入れることです。体内にペスト菌を持たされたノミをPXといいます。ペストの潜伏期間は短いです。ペストの場合、人間にペスト菌を摂取してペストになる。どの段階でペスト菌を取れば良いのか分からないわけです。これはこの下に色々と出典が書いてありますが、この赤い部分は基礎データで、米軍のリポートです。石井機関では「ペストに人為的感染・死亡例の大部分で死の3日前に肺炎を発症し、それに続いて高い感染力を示す」ことをつかんでいた。つまり先ほどの動物体内通過法からすると、ペストの場合には、人為的感染させて肺炎を発症してすぐに血液を採取する。これが最も効果的だということを人体実験で確かめたということだと思います。

先ほど石井は勝手に海外出張に行った、と証言した北野政次部隊長の論文「流行性出血熱の病原体の決定」で、こんなことが書かれています。「発熱極期に剖検すれば唯腎は肉眼的なちよっと「充血を認めるだけである。然しかゝる時期の腎・肝・脾こそ感染力は絶大なのである」。自分はすぐに成功したと。ところが、多くの研究者によって主要流行例ごとに、病原検索が実施されましたが、それは不適當でした。例えば、この発熱極期後の血液。「或は病毒の既に消失した臓器をめあてとしていたゝめ遂に病原を確定することが出来なかつたのであろう」と。

つまり、ペストならペスト、流行性出血なら流行性出血の細菌やウイルスで亡くなった人がいて、亡くなった死体から血液や臓器を取れば、そこに菌が必ずいるわけではない。菌が体にあふれている時期というのは、病気によって全て違うということ、北野は言っているわけです。ですから、実は人体実験を繰り返したのは、病気の原因を明らかにするのではなく、どのタイミングで病原体を取り出せばいいのか、それを知るためにこのような実験を繰り返したのではないかと、今、考えています。

2-6 人体の兵器化—PX製造

表9：PX製造工程（8kg〔衛県〕のPXを準備する場合）

	1日目～9日目	10日目～20日目	21日目
ノミ生産、非ペスト工程	卵・2日間 幼虫・1週間	さなぎ・1～2週間	成虫
	工程(1)：2.7kgのノミと8,200頭のネズミ①でノミ8kgを生産。*		↓
ペスト工程		工程(2)：保管菌株を培養し(2日)、培養菌を160頭の無菌ネズミ②に接種し、発症した段階で(3日)採血しペスト菌を培養・増殖し(2日)、その菌で2万4千頭のネズミ③をペストネズミ④Pにする(3日)。：合計：10日間	工程(3)：2万4千頭のペストネズミを、工程1で生産された8kgのノミに吸血させPXとする。

ヒト1人がネズミ160頭分に相当

2-4 ペスト班長は高橋軍医

ネズミの区分け：工程(1)のネズミ①8,200頭はノミ培養用で無菌である必要はない。工程(2)の菌の毒力向上のためのネズミ②160頭は無菌であることが必須で、②から得た菌によりペストネズミとされるネズミ③2万4千頭は無菌が望ましい。工程(3)は③2万4千頭に工程(1)で増やしたノミを付着させ、ペストノミ④Pとする。

①は野ネズミでも可、②は無菌が必須、③は無菌でなくとも可。

2kgのPXであれば工程(1)が670gのノミと2,050頭のネズミで2kgのノミを生産、工程(2)が40頭のネズミ②で6千頭のペストネズミ③P、工程(3)が6千頭のペストネズミ④Pを工程(1)の2kgのノミに吸血させる。

*工程(3)の6週間前から準備を開始すれば、900gのノミが3週間前までに2.7kgとなるが、その場合ネズミ①が2,750頭ほど余分に必要となる。 帝石 2022.12.10

16

実際にこのペストノミ、PXをどのように作るのか。この表（2-6）は、PXを8キログラムつくろうとした場合にどうなるかを表していますが、ご覧のようにいろいろな工程があります。ノミ生産とは普通のノミを増やす工程で、ペストは全く関係ありません。次のペスト工程、ここではペスト菌をネズミに注射し、そのネズミから採血し、培養・増殖した菌を何千倍ものネズミに接種することでペスト菌を持ったネズミを作ることができる。この工程でペストを持っていないノミを登場させ、ペストに汚染された2万4000頭のネズミを吸血させる。そうすると、このノミは全てPXになります。

具体的に言いますと、8キロのPXをつくるためには、160頭の無菌ネズミが必要です。160頭のネズミに全部ペスト菌を注射するわけです。160頭のネズミからペスト菌を採取した際、本当に予想どおりにペスト菌の感染力が増強しているかどうかをチェックする必要があります。ですから160頭のネズミを使ったならば、160回、160の皿を並べてネズミ1からネズミ160まで、菌が増強されているかどうかをチェックします。大変な作業です。「ヒト1人がネズミ160頭分」と、ここに大きく書いてあります。

培養菌を人に摂取した後、発症した段階で採血する。そして、それを2万4000頭のネズミに摂取して、ペストのノミをつくる。人間1人だと、この1人の中でペスト菌が本当に増強したかどうかチェックするのは簡単です。その人から採血して培養、それから他に摂取すればいいわけですから。160回も本当に感染力増強したかどうかをチェックする必要は、1回で済む。これを確実にを行うために、人体実験をやっていたのではないのでしょうか。このようなことを行っていたから、ペスト班長の高橋軍医は、自分はペスト班ではなくてコレラ班であったと、帝銀の捜査陣に答えたのだらうと思います。

2-7 『防疫研究報告』(3-1)とダグウェイ文書

表-8 「2部」論文の各種病原体研究の研究時期による分類(本数)とヒル&ビクター・レポートの人体実験リスト比較表

年	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	合計
病原体、下段はTab AJの番号(ピーク時)						8月関東軍防疫部発足	小計(本)		8月防疫給水部に改組					
コレラ(2部)	3*	7*	4*	3#			18	1	6	1	5	1	1	33本
20~900(100 & 600)(Tab AJ)								○		○				134例
ゲルトネル(2部)	1				17	2	20		1	2				23本
1 & 3-15(Tab AJ)								◎						14例
鼻疽(2部)					15¥	3W	18				1			19本
16~778(100 & 200)(Tab AJ)								○	○					22例
ペスト(2部)								1		1	26	14	1	43本
25~912(500)(Tab AJ)									◎					180例
炭疽(2部)(1)は753号と923号											5	(1)	(1)	5 + 2本
17~743(300 & 400)(Tab AJ)								◎						35例
結核(2部)											3	14	17	34本
36~756(Tab AJ)								○	○	○	○			82例
チブス\$(2部)				1				3	5	3	9	5	1	27本
29~740(Tab AJ)								○	○	○				63例
ノミ(2部)									2	5	6	11	2	26 + 7本

◎と○はヒル&ビクター・レポートの人体実験リストから見た、それぞれの病原体の人体実験のピーク時を示している。◎はピークがひとつ、○はピークが複数年にわたっている場合である。ノミの+7は『防疫研究報告』1部に掲載された論文が7本あることを示している(40年に1本、43年に1本、44年に5本)

*「2部」受付は全て41年

#「2部」受付は41年が2本、42年が1本

¥「2部」受付は全て41年

\$ 腸チブスおよびパラチブス、発疹チブスとは無関係

常石 2022.12.10

17

少々分かりづらいですが、これが防疫研究報告2部で、ここに約900本の論文があります。防疫研究所が出していたものです。これは日本にはなく、米国の議会図書館にだけあります。2004年5月に写してきました。これらの膨大な論文をずっと、900本、大体1000本、読んでいったわけです。それと、このダグウェイ文書、このようなものと比べていきます。そこで分かったのは、人体実験を非常に大規模に行っていたという事です。PXは、この後から作られるようになります。このような人体実験を見ていくと、実際に細菌兵器として使われたのは、基本的にはペストだけです。コレラ等はほとんどなく、他もあまり使用されていません。日本語の文献で書かれているのですが、ペストの治療法、それから1942年に新疆でペストが流行した事、そのようなことについての論文が書かれています。

表2-7の論文を見ると、ペストを摂取して、腎臓や肝臓、そして肺がどうなったか、そのような事が詳細に書かれています。そこに論文内容数のピークがある。ここから考えていくと、他のこういった人体実験もそうですけれども、ペスト以外にも、コレラ等もこの段階で兵器化を考えていたのかなと思います。ただし結核はどうしても、細菌兵器になりません。この人体実験は、もっぱらBCGなどのワクチン用の人体実験を行っている。それから、結局これまでほとんどありませんが、特効薬の研究なんかを行っていました。

この表を見ながら、1940年にペストの人体実験を集中的にやり、その後1942、1943年とPXが使用されていることを考えると、人体実験の意味は、病気の進行などを明らかにする治療法の研究ではなく、どうしたら動物体通過法を効率よく進めることができるか。それを知るために人体実験を繰り返したのだらうと、今、僕はそう考えています。

ここまでが第2章ですが、何か質問はありませんか。

板倉：会場の方、何か質問ある人いらっしゃいますか。オンラインの方はどうでしょうか。

手は挙がっていますか。今、確認できない。

常石：よろしいでしょうか。

板倉：続けてください。

3章-1 軍学癒着：学位論文

なぜ学位論文か？ 癒着がもたらす学の歪み

科学研究の自由と軍事研究：基本的人権、公開

表4 防疫研究室嘱託研究者

名前（職名）	発表論文	指導論文	備考
小島三郎（東大教授・軍医学校or防研嘱託）	46*	122, 134, 152, 157, 164, 167, 174, 183, 199, 203, 205, 361, 373, 471, 584~9, 872	*防研嘱託として発表、指導は東大教授・嘱託として
継谷省吾（東大教授・嘱託）	88*	899**	*防研所属で発表、**東大教授・嘱託として
内野仙治（京大教授・嘱託）	17, 18	120, 140, 512, 522, 570, 621, 873, 884	
小林六造（慶大教授・嘱託）	379, 527, 683, 801, 807~10, 850(翻訳), 862, 866, 891	308, 311, 312, 328, 354, 402, 411, 412, 421, 422, 431~3, 442~3, 462, 496~6, 523, 532, 562, 573, 641~2, 666, 817, 877	
緒方規雄（千葉医大教授・嘱託）	616, 882	582, 593, 824, 831, 833, 834~6, 881, 895	
柳沢謙（東大教授・嘱託）		610, 612, 846	

常石 2022.12.

表1 2部の刊行状況

号数	発本年月日	備考
1~100	1941年12月31日	
101~200	1942年3月31日	
201~300	1942年7月31日	
301~400	1942年12月31日	
401~500	1943年6月30日	
501~600	1943年-月-日	
601~700	1944年5月18日	国会図書館に2セット存在
701~800	欠	
801~900	1944年10月25日	『寄贈防疫研究室』の書き込みあり
901~947	未製本	

「防疫研究報告」2部



米国議会図書館所蔵分(2004年5月)

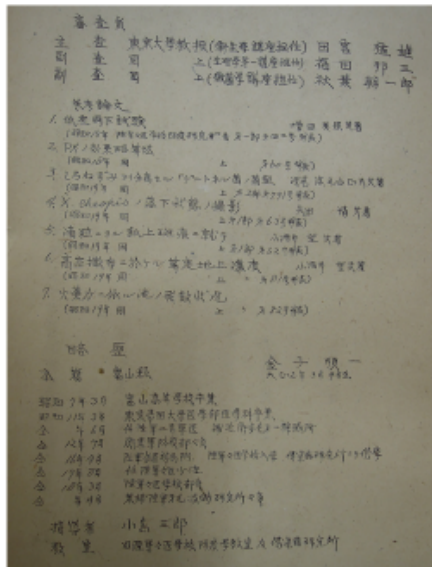
常石：次に進みます。僕が一番お話ししたかったこと、『軍学癒着』です。最後の結論から言うと、731部隊は科学を支える世界を汚染した、という罪深い行為であるという事です。皆がフェアに科学の研究をする、科学者はお互いの信頼関係があって初めて科学研究をやっいていけます。僕はそれを科学者のジグソーパズルと呼んでいます。

嫌いな人間による研究であろうとも、その科学的な成果は認めます。少なくともその人がやった手順を踏み、その結論が得られる場合には、その研究を信じます。そして、それに基づいて自分の研究をさらに組み立てていきます。1人で出来る事はいろいろあるかもしれませんが、科学研究はいろんな人たちの背中に乗って初めて次に向かって行きます。このジグソーパズルで最も大事なことは、透明性が確保されていること、情報操作がないということ。要するに、うそが無いことです。ルール違反の抜け駆け等がない、そういう信頼が必要なのわけです。

嫌な人間でも、例えば医学博士の称号を持っていれば、医学の研究が出来ると認めます。要するに科学者には、二通りしかいないと思うんです。善良で有能な人、邪悪で有能な人、無能な人は科学には残れないのが科学の世界かなと思います。邪悪であっても信頼に足る成果を出していれば、科学界では認めていく。嫌な人間と言っても、性格が悪いとかその程

度の話です。いわゆる刑法で裁かれるような人物ではありません。この前提で、学位論文などを見ていこうというわけです。

3-2 小島三郎東大教授 石井機関囑託、予防衛生研究所長(2代目*)



* 初代は次頁の小林慶大教授

1943年小島の主張：「研究題目
.....戦力増強に職域奉公する覚悟で
.....共同研究で急速に解決すべきものへの切り換えを促すためには、教授会が共著論文をも審査する」

「戦勝への道」、『日新医学』11号、1943年、p.1
小島は金子の指導教官を務め、共同研究の訴えは小林六造（慶大教授、初代予見所長）が悪用(3-3)

学振は創設10年弱で、「国家重要問題の解決に
.....総合研究を行う為め設置したものは災害科学研究所1、物理探鉱試験所1、考査委員会1、外国特許権調査特別委員会1、特別委員会23、小委員会67で、その委員及び研究者は1,831人」となった。「国家重要問題」とは結核などの感染症や食糧問題なども含め軍事目的をもったものであり、そのための総合研究と理解する研究者が多かった。（『日本学術振興会学術部事業報告』41年版 p.149）

19

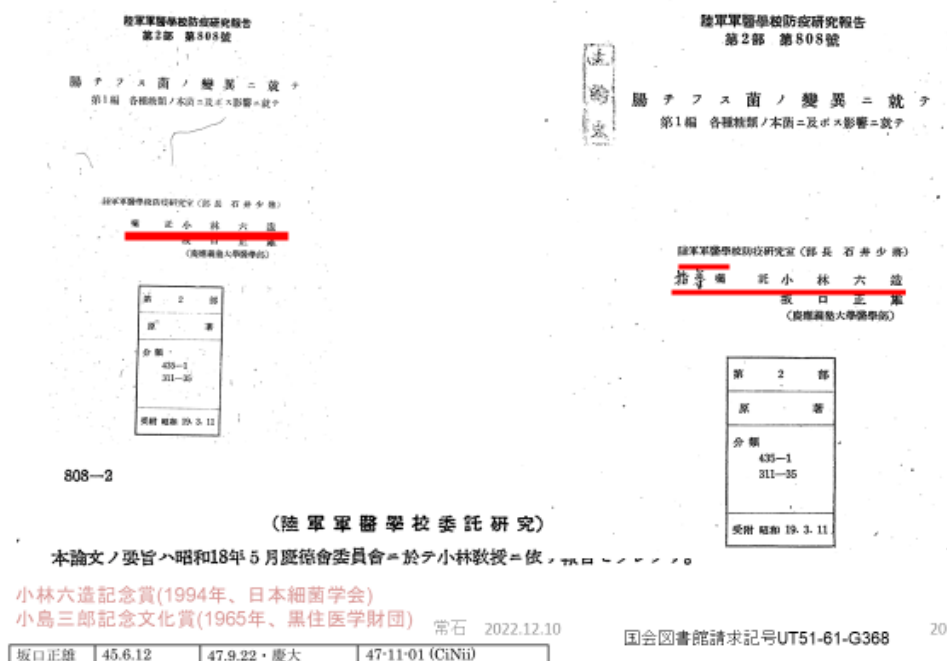
ここで基本になるのが、研究室囑託研究者。防疫研究報告（以下、防研）による1000部くらいの論文を見ていくと、防研の囑託として論文を発表したり、あるいは指導した論文がある、そのような研究者として、東大教授の小島、細谷、京都の内野、慶應の小林六造、千葉の緒方、東大の柳沢が、それぞれ論文の指導や、自分の論文発表を行っています。小林が一番多いです。原本は残念ながら日本にはないのですが、この本を基にして復刻版が不二出版から出ています。具体的に見ていきましょう。

最初の小島三郎。まず当時の研究の雰囲気話を話します。小島は1943年「戦勝への道」(『日新医学』)で、次のような事を書いています。「研究題目、戦力増強に職域奉公する覚悟で、共同研究で急速に解決すべきものへの切り換えを促すためには、教授会が共著論文をも審査する」。教授会が審査するのは、学位論文ですが、ここで言っているのは、今共同研究は非常に必要なのだから、学位論文は基本的に単著だが、共著論文でもよい、と言っているわけです。

この年(1943年)は創設10年を迎えていた学術振興会についても話します。これは学術振興会の文書です。「国家重要問題の解決に、総合研究を行う為め設置したものは災害科学研究所1」。それから特別委員会があり、「その委員及び研究者は1831人」が軍事動員されましたということです。これは見づらいかと思いますが、最後の部分に指導者小島三郎と書いてあります。これが、金子順一という人物の学位論文の審査書類です。審査に当たったのは、東大教授の田宮猛雄、福田邦三、秋葉朝一郎です。ですから小島三郎は金子順一の指導

教官をやっていました。とりあえず金子の名前だけ覚えておいてください。先ほどの金子です。

3-3 小林六造慶大教授の愚行



「小林六造慶大教授の愚行」。何かというと、さっきの防衛研究報告の2部に、808号に「腸チフス菌ノ變異ニ就テ」という論文を、防研の囑託の小林六蔵と慶應義塾大学医学部の坂口正雄が連名で書いています。実はこの表紙のすぐ裏、2ページ目には「(陸軍軍醫學委託研究)本論文ノ要旨ハ昭和18年5月慶徳會委員會ニ於テ小林教授ニ依テ報告セラレタル」。つまりこの論文は基本的には小林六造の論文です。それが、こちらに少々見にくいですが「45年 CiNii」と書いてありますが、これは国会図書館の請求記号です。請求すると坂口正雄が「腸チフス菌ノ變異ニ就テ」で学位を取得したことが分かります。あくまで書類上は、という話です。

何が問題なのか。3-3の左側に「囑託」とありますが、その前は空白です。こちらが元論文です。学位論文になると「囑託」の前に「指導」という書き込みがありますが、これは学位主論文であるという意味です。左側の「囑託」論文は、この段階では、小林六造を筆頭とする、坂口にとってはお手伝いの論文なのですが、右側の学位論文で「指導」という2文字が入ることにより、坂口正雄の単著論文になってしまいます。これで坂口は学位を取ります。国会図書館の請求記号で検索すると、学位論文として出てきます。先ほどの小島三郎の話からすると、まさに抜け道です。許されないことです。小林六造記念賞は、日本細菌医学会の賞なのですが。小島三郎記念文化賞も黒住医学財団が作っています。両者共に、現在においても日本医学界における大物なわけです。

3-4 博士学位規則

大正9年7月6日勅令第200号

1920年（大正9年）学位令

2条 学位は大学において、文部大臣の認可を経てこれを授与する。

7条 学位を授与された者は、授与の日より6月内に、その提出に係る論文を印刷公表しなければならない。但し、学位授与前既に印刷公表されたものであるとき又は文部大臣において、その印刷公表が相当ではないと認めたものであるときは、その限りではない。

10条 学位を有する者が、その榮譽を汚辱する行為をしたときは、大学において、学位に関する規程により文部大臣の認可を経て、学位の授与を取消することができる。

1956年（昭和31年）に学位規則の制定（7条但書後段&10条は削除）

常石 2022.12.10

21

これは、1920年の学位令です。今は1956年に新しい規則ができて内容は変わりましたが。当時7条には「公表しなければならない」と書いてあります。「但し・・・印刷公表されたもの」。この次が問題です。「又は文部大臣において、その印刷公表が相当ではないと認めたものであるときは、その限りではない」。つまり、学位論文を印刷してはならない場合があるということです。このような規定がありました。さらに10条になると「学位を有する者が、その榮譽を汚辱する行為をしたときは、大学において、学位に関する規程により文部大臣の認可を経て、学位の授与を取消することができる」という記載もありました。この二つ、7条の「又は」以降と10条というのは、56年の戦後の学位規定ではなくなっています。ですから小島はともかく、小林の行為はまさに榮譽を汚辱する行為だと思いますが、この事に関して慶應大学は何も行っておりません。

3-5 学位論文

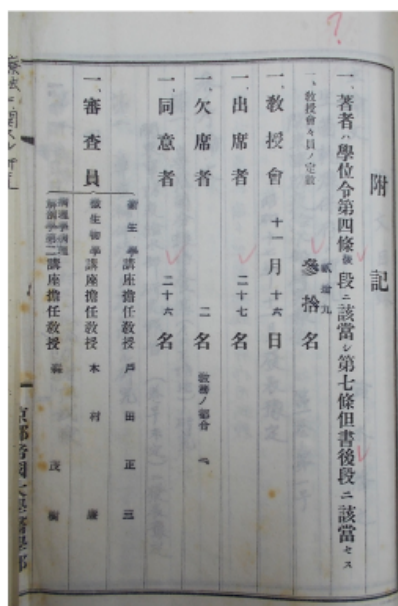
人体実験・細菌攻撃、非公開論文、敗戦後改ざん論文

内容・形態	研究者	申請・許可	論文タイトル	備考
人体実験	平沢正欣	45.6.6-45.6.6-45.9.26	イヌノミのベスト媒介能力に就ての実験的研究	スピード審査、頭痛、審査評価
細菌攻撃	金子順一	44.12-49.1	雨下撒布ノ基礎的考察	東京裁判、増田(美)と共著論文
非公開論文	鈴木啓之	42.9-43.2	特殊大量生産を目的とする生菌乾燥保存の研究	京大-文部省書簡
	増田美保	44.2-44.7	投下物に対する空気の状態の影響に関する研究	雨下実験、審査評価、理学博士
6研、非公開	青山虎彦	41.11-42.7	殺虫剤に関する研究	「青酸」、トリプル(殺虫剤、産業、BW)、農学博士
改ざん	上田正明	45.8-46.4	粘質に関する細菌生物学的研究	軍事研究隠蔽目的の表題他の改ざん
	林武夫	47.5-47.10	B.C.G.に関する実験的研究	研究目的隠蔽のための本文の黒塗り

ここで問題なのは、公表を認めない、そのような学位論文があったということ。非公表の論文は、この真ん中の三本です。上の2人（平沢と金子）は、731部隊石井機関の人間です。この青山というのは、科学域の6研の研究者でした。内容的に言うと、これは人体実験に関する事を書いている。それから先ほどの小島三郎が指導教員を務めた金子順一は、自身の学位論文に日本が行った細菌攻撃のリストを添付しています。

それから次が、これも非公開論文で上田正明と林武夫です。いずれも731部隊関係ですけれども、表紙の改ざん等をしています。青山から上が改ざんなしの論文ですが、これら全て申請時期が1945年6月、1944年12月、1942年、1941年、と敗戦前です。上田正明1945年8月。厳密に見ると8月20日ぐらいです。よく敗戦から1週間もたたないで学位申請出来ると思いますが、上田はそうしました。それから林は1947年の5月に学位申請しました。敗戦後に提出された学位論文には、改ざんがあるという表です。

3-6 非公開論文—該当~~せ~~ス



京大から文部省への手紙(1942年)、国立公文書館
「学位授与認可申請に関する件
十二月十日付を以て御照会相成候十一月二十六日機第一七七号に依り申請の滋賀県鈴木啓之に係る標記の件右は軍関係のものにて特に秘密を要するものと本学医学部教授会に於て決定相成たるものに付可然御取扱相成度様致度此段及回答候也」

文部省学位掛から京大総長あての手紙、京大文書館
「『後段に該当せず』とあり別段秘密を要するものにあらざるが如きも主論文には『秘』ともあり如何なるものなりや」

青山の「調書」の5項目目に「論文は軍事上の機密に属するを以て公表せざるを適當とす」と書き込まれている。鈴木の場合こうした「手続き」を欠いていた

公開制限による情報操作

青山の論文タイトルは「殺虫剤に関する研究」だが、学位論文の目的は不安定な化合物であるシアン化水素（青酸）の「安定化並に其機構」の研究だった。それは青酸ガスを大量に貯蔵し、大規模使用に道を開くためだった

具体的な非公開論文の話となります。これは先ほどの鈴木論文で、この論文について京都大学から文部省への申請書類の一つです。ここに、赤くクエスチョンマークがついています。また、ここの赤いレ点はチェックしたことを示しています。極めて不思議なことがあります。京都大学から文部省への手紙が添付されているのですが。「十二月十日付を以て御照会相成候十一月二十六日」等々。「標記の件右は軍関係のものにて特に秘密を要するものと本学医学部教授会に於て決定相成たるものに付」、然るべく処置してほしいという旨が書かれている。公文書館には、これしかありませんでした。

ところで京都大学の文書館に行くと学位掛から京大総長宛てに手紙があります。「後段に該当せず」ここですね。第7条ただし「『後段に該当せず』とあり別段秘密を要するものにあらざるが如きも主論文には『秘』ともあり如何なるものなりや」。これに対して、これは

軍関係の論文で、教授会が認めたから、該当するにももらえないと困る、というのがこの手紙です。ということは、1942年ぐらいになると、非公開にするのはかなりルーズになっている。青山たちの場合には非常に厳格です。第6陸軍技術研究所の所長の手紙等と同等の扱いにしてくれと。

青山に移ります。青山の論文タイトルは、先ほど見たように「殺虫剤に関する研究」です。しかし「学位論文の目的は不安定な化合物である」、青酸の「安定化並に其機構」の研究です。目的は「青酸ガスを大量に貯蔵し、大規模使用に道を開くため」でした。ですから、「安定化並に其機構」ではなく、青酸ガスを大量に貯蔵して、大量に使うにはどうしたらいいか。つまり毒ガス、殺虫剤、それから工業原料としても使う、そういうトリプルユースです。だから、「安定化並に其機構」だと青山が考えていた青酸ガスの殺虫剤に関する研究ですと、トリプルユースの一つしか満たしていない。つまり公開制限による情報操作の対象となり、後に続く人たちが使えないということになってしまいます。これが軍事研究が資源の無駄遣いになる一つの例だと思います。

3-7 平澤軍医の学位論文

主論文
「イヌノミ」Ctenocephalus canis Curtisの「ペスト」媒介能力に就ての実験的研究
参考論文
1 飢餓蚤の能力に関する研究
2 障害蚤の能力に関する研究
3 撒布蚤の各種環境に於ける生存期間に関する研究
4 蚤飼育用鼠の運動制限に関する研究
主論文の研究場所は満州731部隊、参考論文は防疫研究室

申請45.6.6-審査45.6.6-授与45.9.26

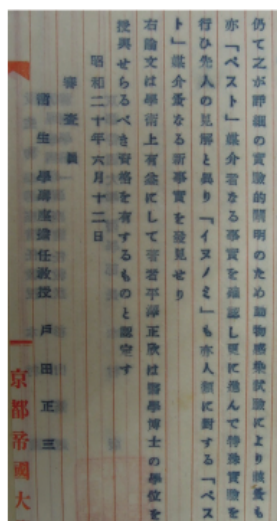
平沢は6月11日、操縦する飛行機の事故で死亡

京大医学部 1945年9月26日付で博士号
 国会図書館請求記号 UT51-60-Q534
 国立公文書館[請求番号]昭49文部00041100[件名番号]008
発行 2022.12.10

24

次は平澤軍医の学位論文です。上が主論文の題名、以下は参考論文です。彼は申請、審査および授与が1945年。パイロットであった彼は、申請した5日後、平房で操縦していた飛行機が墜落して死亡します。ここで注目していただきたい事は、審査まで全く日がない事です。9月にはもう学位が出ています。僕は、平澤の場合には、本当に審査をしたのか、あるいは事故の前、まだ生きていたときに学位申請をしたのだろうか、と疑問に思っています。しかし、問題は中身です。この平澤の論文を審査したのは、3人いますが、京都大学の医学部長にもなったトダマサオも審査員の1人です。

3-8 平澤軍医の学位論文 頭痛を訴える猿と特殊実験



「更に進んで特殊実験を行ひ先人の見解と異なりイヌノミも亦人類に対するペスト媒介蚤なる新事実を発見せり……右論文は學術上有益」



赤線部分は「発症さるハ附着後6-8日ニシテ頭痛、高熱、食思不振訴へ同時ニ局部淋巴腺ノ」

常石 2022.12.10

25

これが平澤軍医の学位論文です。ここに（スライド右中）赤線部分があります。「発症さる」とありますが、これは発症したサル。つまり、モンキーですね。「発症さるハ附着後6-8日ニシテ頭痛、高熱、食思不振訴へ同時ニ局部淋巴腺ノ」等々。サルが頭痛を訴えたわけです。サルが高熱出した、あるいは食欲不振という事は分かります。しかし、どのようにしたらサルが頭痛を訴えているのが分かるのか。この「サル」は人間でしかないわけです。こんなものが学位論文になり、これに対しても審査員たちは「更に進んで特殊実験を行ひ先人の見解と異なりイヌノミも亦人類に対するペスト媒介蚤なる新事実を発見せり、右論文は學術上有益」。こんな人体実験をそのまま見過ごしているというか、奨励しているわけです。

3-9 金子軍医の学位論文

金子順一：授与年月日 1949.1、東大の決定は 48.11.25	元論文受理年月日	元論文掲載誌	備考
①雨下散布の基礎的考察 参考論文	1941.8.11	1-41	所属防研
②低空雨下試験（増田薬剤大尉が筆頭）	1940.6.7	1-42	加茂部隊
③PXノ効果略算法	1943.12.14	1-60	防研
④しろねずみヨリ分離セル「ゲルトネル菌ノ菌型」（筆頭浅見軍医少佐）	1944.1.17	2-791	防研マル秘
⑤X.Cheopisノ落下状態ノ撮影	1944.2.24	1-63	防研
⑥滴粒ニヨル紙上斑痕ニ就テ(2 nd が小酒井中尉)	1944.2.7	1-62	防研
⑦X.高空散布ニ於ケル算定地上濃度(2 nd が小酒井中尉)	1944.6.16	1-81	防研
⑧火薬力ニ依ル液ノ飛散状況(2 nd が小酒井中尉)著者名は p.2 に移動	1944.7.1	1-82	防研

①、②、⑤&⑥液体およびノミの投下・噴霧

② 100mの低空飛行から液体70lを雨下、進行20mの所の水滴の径は0.5mmだが水滴数は最大、30mでの径は1.0mmで体積は最大。分裂総数10億個と推定

常石 2022.12.10

26

次がもう一本、小島三郎の下で研究していた金子軍医の学位論文です。このような論文です (3-9)。

3-10 「PXの効果略算法」 が明らかにした日本軍のBW攻撃

表8：使用PXの量と効果(被害)の関係と石井理論

攻撃都市	PX (Kg)	効果(罹患致死)		1.0Kg換算値			備考 試行日時・被害者数
		1次	2次(=全効果-1次)	全効果 (=1次×流行係数)		流行係数 (補正值)	
				理論値	補正值		
農安	0.005	8	607	123,000	82,900	76.9 (51.8)	1940.6.4・\$
農安大賚	0.010	12	2,424	243,600	82,900	203.0 (69.1)	1940.6.4-7・\$
衢県	8.0	219	9,060	1,159	1,175	44.2 (42.9)	1940.10.4・21*
寧波	2.0	104	1,450	777	980	14.9 (18.8)	1940.10.27・99*, 106#
常德	1.6	310	2,500	1,756	1,680	9.1 (8.7)	1941.11.4・8*
広信・広豊・玉山	0.131	42	9,210 (2,910の誤記)	22,550	19,430	70.3 (60.6)	1942.8.19-21
合計		695	25,251				

過大な見積もり：695人 → 25,251人 (-2,910 = 22,341人)
被害者側による見積もり：521 + 21 + 106 + α = 648人

注：使ったPXが1kgを超えているのは低空飛行の航空機からの散布で、それ未満で複数日にわたるものは街に入り込んだ工作員による謀略的な散布と考えられる。「攻撃都市」や「効果」、「1次」・「2次」それに「流行係数」は金子の論文の用語を使用している。効果の1次、2次、理論値、補正值、流行係数の数字はいずれも金子が記しているものだ。流行係数のカッコ書きは全効果の修正値に合せた補正值である。効果の計算方法は農安の場合、607 (2次罹患致死数) = 8 (1次) × 76.9 (流行係数) - 8 (1次)、となっている。

\$ 中国の統計では1940年の農安全体での発生数は521人で、発生地点は14ヶ所。1941年は10ヶ所716人。『戦場の疫学』(海鳴社、2005年、p.118)

* 中国保健省調査：1942.3.31 # 黄および呉調査：1994.3

27

PX 効果略算法というのを見ます。これは、日本軍がどのような細菌攻撃を行ったかを物語っています。1940年の農安から、農安は新疆の近くです。それから衢県、寧波、1941年に常德、そして1942年の広信その他。このようなことを行ったとバラしているわけです。これが学位論文です。これで問題なのは、1次の効果で695人、2次の効果で2万5251人、合わせて約2万5800人に被害を与えることができたと評価しています。

側に備考欄がありますが、これは中国側の見積もりです。これだとトータルで648人です。何のためにPX 効果略算法があったかという、PXがいかにか有効であるかを算出する為です。PX 効果略算法は、1943年12月14日で、これから約6カ月後にサイパン攻撃が起こります。つまりPX 効果は非常に効果的であるから、サイパンでも使用できることが、うたわれています。そんなものが学位論文の参考論文になっているのです。このようにPXが有効だということでサイパンに派遣されたチームは、非常に迷惑だっただろうと思います。

3-11 増田薬剂官の学位論文

審査委員の評価：著者は……自身の航空に対する特技と、多くの資材及補助員を動員し得る位置にあるを利用して必要に応じて飛行機実験を**実行**し、或は上層観測を実施して所要の研究材料を**獲得**する。

金子主論文
雨下散布の基礎的考察
1941.8.11、1-41、所属防研

低空雨下試験（増田薬剂大尉が筆頭）
1940.6.7、1-42、加茂部隊

常石 2022.12.10 「投下物に対する空気の状態に関する研究」

それからこれは、増田という薬剂官による関東軍防疫給水部研究報告。このような雑誌を出していて、パイロットでもあった増田はこのように書いています。「審査委員の評価、著者は……自身の航空に対する特技と、多くの資材及補助員を動員し得る位置にあることを利用して必要に応じて飛行機実験を実行し、或は上層観測を実施して所要の研究材料を獲得する」。要するに軍でなければこのような研究はできない。それを京都の先生がうらやましく思い書いているのかよく分かりませんが、これがその当時の雰囲気でした。

3-12 出自を隠す 表紙を作り替え、結論を欠いた学位論文

1. 豚胃粘膜「アルカリ」抽出液の酢酸分劃と其の細菌毒性増強作用に就きて

3. 豚胃粘膜「アルカリ」抽出液の酢酸可溶性分劃(胃類粘素 Magenmucoid:PA) と其の細菌毒性増強作用に就きて

6. 植物および動物のタンパク質や多糖類から得られる粘質の細菌毒性増強作用

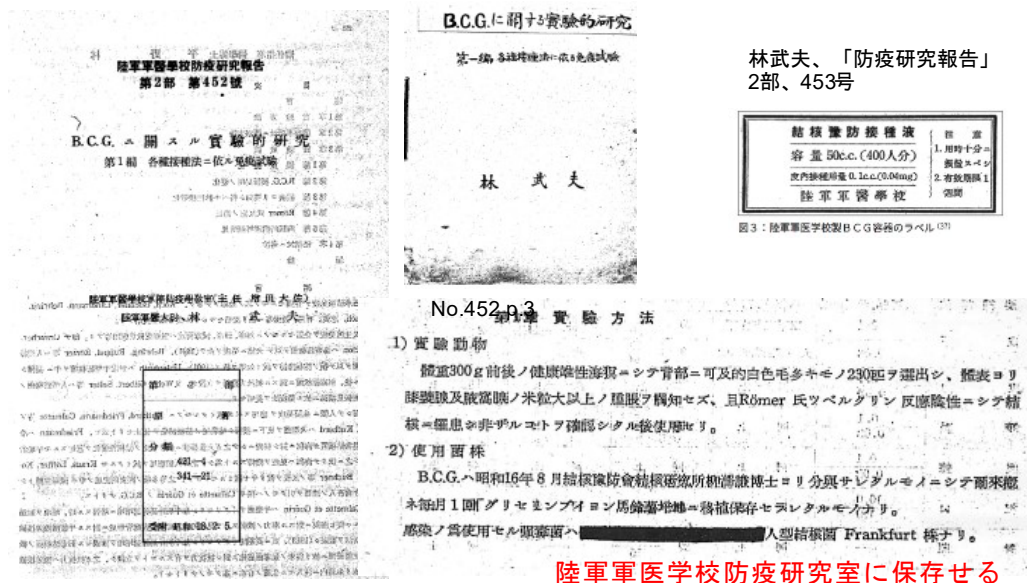
7. 粘質の細菌毒性増強作用機転に就きて

第1編から第7編のうち、5編までが学位論文。6および7編は米軍には提出したが学位論文から除外されている

これ(3-12)は、敗戦後に提出された学位論文で、これが大本の論文となります。表紙をこのように作り変えて提出しました。陸軍軍医学校という文字が全て消えています。また軍医大尉などの記述も、全て消去されています。医学しか残っていません。軍の研究であるということを、隠しているわけです。さらに、この学位主論文の1編、3編について言うと、これが本当のもともとのタイトルで(3-12表左「豚胃粘膜アルカリ抽出液の酢酸分割と其の細菌毒性増強作用に就きて」)、サブタイトルはこれ(表3-12の左、3「豚胃粘膜『アルカリ』抽出液の酢酸可溶性分割(胃類粘素 Magenmucoïd:PA)と其の細菌毒性増強作用に就きて)ですが、1編の「其の細菌毒性増強作用」さらに3編の「其の細菌毒性増強作用」も消されて、軍とのつながりがなくなっています。

さらに問題なのは、6編と7編は学位論文から外されています(3-12左表下)。しかし、米軍には1から7まで提出されています。この6と7がないことで、これは学位論文ではなくて、結論を欠いた学生のレポートのような代物になっています。何故出せなかったかという、タイトルから「細菌毒性増強作用」、「細菌毒性増強作用に就きて」、これを抜くとタイトルにならないわけです。全く馬鹿げた話です。だからここに書いてあるように「表紙を作り替え、結論を欠いた学位論文」。しかし、6と7までをしっかりと読んでいくと、つまり米軍に提出された情報からすると、動物体通過法は意味がないと彼は結論付けています。もっと早く結論付けていれば、あのように採血するような残虐なことはせずに済んだのかもしれない。

3-13 出自を隠す—表紙の作り替え



林武夫、「防疫研究報告」2部、453号

結核菌防疫接種液	容量 50c.c. (400人分)	1. 用時十分前 振盪スベシ
夜内接種時量 0.1c.c. (0.04mg)		2. 有効期限 1 週間
陸軍軍医学校		

図3：陸軍軍医学校製B.C.G.容液のラベル⁽³⁷⁾

3-14 出自を隠す—乾燥BCG

主論文: B.C.G.に関する実験的研究1~4	本文の黒塗り箇所
1.各種接種法に依る免疫試験	強毒菌は陸軍軍医学校防疫研究室保存人型結核菌(論文1)
2.超音波ワクチンに依る免疫試験(指導柳沢)	陸軍軍医学校防疫研究室に保存せるB.C.G.菌株を以て実験的結核感染に対する感染防禦能(論文1)
3.保存ワクチンを以てせる免疫試験(指導柳沢)	長時間保存し得ることを要し、殊に作戦地域の広大に互る現下国軍の状況に鑑み、之が補給上(論文3)
4.乾燥ワクチンに依る免疫試験	普及の最大障碍にして、作戦地域南北広範囲に互れる今日軍内汎く之を応用(論文4)
参考論文: BCG乾燥ワクチンに関する研究第1~3編	余は前校長桃井軍医中將の命によりB.C.G.乾燥ワクチンの研究に着手し(論文4)
1.生存試験	普及上最大の障碍である、殊に作戦地域が南北広範囲に互っている今日海外への(参1)
2.免疫試験(指導柳沢)	現況の如きは軍隊補給の実情に副わざる(参1)
3.人体接種成績	認めている處であるが、殊に皇軍作戦地域の現況に鑑み此の点の打開が(参2)

参考論文3: **実験対象**を伏字、「**工場工員**」や「**軍医学校**」その他**いずれも中学生以上**

少々はしょっていきます。これは林という人物のBCGに関する研究。このように、彼も色々な文字、陸軍軍医学校などの言葉類を全て消していきます。さらに実験対象に陸軍工場工員や軍医学校を使っているのですが、それも省略している。ここで一個、頭に入れておいていただきたいのは、彼は凍結乾燥、BCG乾燥ワクチンの人体実験もやっています。これは人が死んでいない。どこまで当人の承諾を得ているかは別にすると、今から見てもまあまあともな研究といえます。1945年ぐらいの戦争中の段階としては、そんなにひどい実験ではありません。ただし、この人体摂取実験の対象は、この工場工員や軍医学校の生徒たちですので、いずれも今で言う高校生や大学生の17~18歳の人を対象でした。

林は、このような人たちを対象にして乾燥BCGが使えることを明らかにしました。

3-15 デュアルユーステクノロジー

言い訳

内藤メモ'81.11.1

乾燥人血漿 (輸血代用)	皇室へ献上
浮水機	天覧品 & お召艦
ペニシリン (慶喜)	
BCG (乾燥)	
ペスト. ワクチン	
炭疽 ワクチン	
コレラ. ワクチン	
破傷風血清	内藤良一：石井の番頭を自認、1950年日本ブラッドバンク設立(ミドリ十字の前身)

常石 2022.12.10

32

3-16 軍学官産：輸血 & BCG、薬事法

ルーツは軍医学校防疫研究室の凍結真空乾燥装置

乾燥BCG：「厚生省告示第207号」官報6810号、1949年9月24日→→1951年、結核予防法

BCG接種対象は**児童**

もうひとつの結核対策が(米軍統治下の)**沖縄**で

乾燥人血漿：「厚生省告示第303号」官報7181号、1950年12月16日→→1951年春、日本ブラッドバンク営業開始

GHQの担当者「**ポーズマン博士の特別なはからいで、大蔵省の承認を得ることができた**」のが1950年11月(『株式会社ミドリ十字三〇年史』)

常石 2022.12.10

33

何が問題かという点、3-16です。乾燥BCGを厚生省が官報6810で認可して、1951年の結核予防法で使われるようになります。生ワクチンは、腐敗したりするので使用禁止にして、乾燥ワクチンに切り替えたのです。ここで何が問題かという点BCGの接種対象が児童なのです。当時、それまでに林の人体実験データしかなく、児童についてはおそらく数十名のデータしかありません。大規模なのは、林が大人に対してやった実験だけです。そのデータをもとに日本全国の児童に対して、結核予防のBCGをやったわけです。

3-16 軍学官産：輸血&BCG、薬事法

ルーツは軍医学校防疫研究室の凍結真空乾燥装置

乾燥BCG：「厚生省告示第207号」官報6810号、1949年9月24日→→1951年、結核予防法
BCG接種対象は**児童**

もうひとつの結核対策が(米軍統治下の)**沖縄**で

乾燥人血漿：「厚生省告示第303号」官報7181号、1950年12月16日→→1951年春、日本ブラッドバンク営業開始

GHQの担当者「**ポーズマン博士の特別なはからいで、大蔵省の承認を得ることができた**」のが1950年11月(『株式会社ミドリ十字三〇年史』)

常石 2022.12.10

33

厚生省の本音と建前からすると、随分いい加減なことやりました。

日本全体では、この結核予防と同時に、沖縄の米軍統治下で結核対策が行われています。日本本土ではBCGが使えましたが、沖縄ではBCGを使用しませんでした。1969年復帰の3年程前ですけども、厚生行政が一元化される際に調べると、結核の発病率や死亡率は、戦前は沖縄が日本本土よりもはるかに高かった。ところが米軍の統治何十年か経て、つまり二十数年経て、本土と比べると沖縄の状況のほうがはるかに低くなっている。ですから、BCGを使用した結核予防法は意味がないように思えます。沖縄のように、BCGを使わないほうがいいということになる。しかし、日本では今のところそうはなっていません。

それから次に、乾燥人血漿。これはミドリ十字の内藤良一が行いました。日本ブラッドバンクから来て、このときはGHQの担当者、内藤良一が編集した『ミドリ十字三〇年史』に、GHQの「ポーズマン博士の特別なはからいで、大蔵省の承認を得ることができた」と書いてあります。つまり、抜け駆けです。まさに軍産複合体です。

最後にちょっと、はしょってしまいましたが科学者たちのジグソーパズルや、透明性の確保、という最初にお話ししたことに繋がります

石井たちの失敗の一つは、透明性の確保、つまり信頼することを欠いていた。防疫研究報告を読んでいくとよく分かりますが、石井たちが細菌兵器開発、医学兵器開発のために細菌兵器を考えたときに、彼らは1932年から1935年にかけて、かなりの諸外国の論文を読んでいます。それを見ると、まだ始まったばかりの細菌兵器について、疑問点がいろいろ書かれています。しかしながら石井たちは、これは所詮論文である、しかも軍事的な問題だから正確に書いてあるかどうか分からない。そのような理由で、我々は自らの道を行く、と言っています。本当はその時点で疑問を呈して論文を精読すべきでしたが、それをしなかった。それが彼らの最大の弱点だったかもしれません。

次の時代のために

- ・ 731部隊(石井機関)は**失敗**であり**罪深い活動**
 - 失敗はBW／罪は科学を支える世界の汚染
- ・ 科学の世界は「**ジグソーパズル**」
 - 科学情報の流通、透明性の確保(**信頼**) vs. 情報操作
 - 情報操作はウソがまかり通るということだ
 - ルール違反の抜け駆け：学位論文、BCGや輸血

なぜ歴史を研究するのか：これまで日本政府は自国の負の歴史から逃避することが多いが、近年政府の統計も信頼できなくなっている。2020年には勤労統計の調査漏れが明らかとなった。さらに2021年には都道府県の「建設工事受注動態統計」という国内総生産（GDP）の算出にも用いられる基幹統計を外交省が書き換えていたことが明らかとなった。確実な証拠に基づかない歴史研究はフェイクである。今の日本はその存在自体がフェイクとなっているのかもしれない。この国で、確実な証拠にこだわることにむなしさを感じる。しかし僕たちにできることは日本が実体を伴った国として自立するよう、政府が歴史的事実を含め確実なデータ、証拠を残し、生かすよう監視をし、信頼できる実績に基づいて国を動かすことが民主国家として「当たり前」なのだというカルチャーを確立することだ。本書がそのカルチャー作りの隅っこの一端を担うことを願っている。2022.1.18

常石 2022.12.10

34

あと最後に書いてあるのは、今年（2023年）2月に出た僕の本の一部です。歴史をやるといことは民主国家を支え、維持することなのだろうと、僕は思います。これを読んでいただければ、取りあえず、今日お話ししたことは、こんなところでいいのかなと思います。

板倉：常石先生、どうもありがとうございました。

常石：あとでもう一回、最後の所を読んでいただければ幸いです。

板倉：おそらく多くの方が質問お持ちだと思いますが、ここで休憩したいと思います。5分ほど。ちょっと休憩をとって。その後で質疑を受ける形にしたいと思います。どうもありがとうございます。

常石：どうもありがとうございました。

板倉：また5分後。

質問：質問した私は昭和10年生まれで、今、87歳です。10歳のときに原爆被害に遭いました。実は私はその前に生まれたのは、南方のスマトラ島でした。昭和10年に生まれて、昭和16年、日本のアジア太平洋戦争が始まるということで、スマトラから強制送還され、母親の郷里の茂木に引き揚げてきました。そうした中で、学校で習ったのは、教育勅語一辺倒です。それによって、私は早く大人になって、天皇のために命をささげたい。こういう教育を受けてまいりました。

私は、10歳の少年が、将来、自分の命を捨てる。こんな誤った政治を二度と繰り返してはいけない。そのときに、自分は今、何をしなければいけないのかということ最近つくづく思う次第です。ロシアのウクライナ侵略に見られるように、21世紀になって今でも人が殺し合う。こんな殺し合いの時代を一日も早くやめさせて、平和的な外交によって本当に地球が平和な、そうした状況になるように残された人生を頑張っていきたいと思います。そういう意味で、今日の先生の731部隊の問題について話を聞かせていただきました。

一つ、質問です。長崎大学が、この731部隊に関わったということを知っていますが。他県で、例えば兵庫県では、731部隊に関係した人たちの総括が行われたと聞いております。長崎大学では、そうした総括はされたのでしょうか。そのことを教えてください。

常石：長崎大学で関わっていた人はよく分からないんですけども。僕が今日お話しした中で、あんまり触れることはできなかったけど、内藤良一っていう人に言わせれば、「日本の細菌学者で、その当時、731部隊と関係のなかったやつはいない」と言っていました。総括なんていうのは嫌なんだけど、歴史に対してどう向き合っていくかということについては、もう亡くなっているけれども、小林六造とか、小島三郎にきちんと向き合ってほしいし、医学界は今も彼らの名前を付けた賞を出していますが、その賞の妥当性について、きちんと歴史と向き合って、続けるのか続けないのか。続けるとしたらどういう理由があるのか、やめるとしたらなんでやめなきゃいけないのか。そこをちゃんと見てほしいと思っています。

板倉：ありがとうございます。他にありますか。

板倉：ワキヤマさん、あ、感想ですか。ちょっと読み上げましょう。「今日、お話ありがとうございました。2006年に岡まさはる記念長崎平和でもお話し頂きました。」

常石：チャット読みました。どうもありがとうございます。

質問：常石さん、どうもありがとうございました、今日は。久しぶりにお顔が見えてよかったです。岡資料館も引き続き頑張っています。これからも引き続き、過去の日本の、戦争の加害の歴史について、伝え続けていきたいと思っています。ありがとうございました。

常石：はい、こちらこそありがとうございました。

板倉：他にありますか。ちょっと私も質問してもよろしいでしょうか。動物体通過について、最初から誤った前提というふうに紹介されて、最後にはやっぱり意味がなかったと、そういう実験結果も出てきたと説明いただいたんですが。誤った前提とは言いつつも、一定の効果はあったんじゃないんでしょうかね。結局、何が原因でこれが感染力の増強って

というのが起こっていたのかは分かっているんですか。

常石：少なくとも最後に取り上げた上田さんの論文を読むと、簡単に言っちゃくと、病原体を動物に接種して、そこからまた病原体を抽出して、次に与えるんですけども、その抽出の段階で雑菌が入り込む。雑菌が絶対に入らないように同じ実験を繰り返すと、菌力の増強はありません。雑菌入る可能性が残るやりかたは、実験としてやりやすい。それでやると、動物体内通過の効果があるように見えます。

それは、1932年に集めたコレラ菌の分析をしたイノウエザカタモっていう軍医がいて、彼が1933年の論文の中で、もしかすると雑菌が入り込んで強くなっているのかもしれないと書いています。上田正明は、本当に敗戦の直前になって、動物実験、増強法は間違いだと明確に結論付けています。ただそれを学位論文の中では、その結論部分は学位論文からは落ちています。これが、状況です。要するに、雑菌が混じっちゃった、それで感染力が強くなっているように見えたということです。

板倉：ありがとうございます。なるほどですね。

板倉：他にはありますでしょうか。オンラインの方も、質問はありますでしょうか。じゃあ、私がもう一つ、質問させていただいてもよろしいでしょうか。

常石：はい。

板倉：この著書の最初に、軍事研究の最も難点というか、重要な点は、自由性と公開性が損なわれている点であるとおっしゃっていたんですね。私は、軍事研究はやはり、非人道的なことにつながる。そういう兵器を作成するというのが問題と考えていたんですが。それよりも、公開性とか自由性がないことを問題にしているところを意外に思ったんです。その真意というか、どういうおつもりでそういう主張になるのか、もう少し教えていただきたいと思うんですが。

常石：信頼ということですね。自由がない、公表できない、あるいはタイトルを偽って出すとか。さらに、この部分は言えないというのは、科学者相互の信頼関係を打ち壊していきます。それは、僕は、今度の防衛省の献金もそうだけど、ああいう補助金をもらうことによって、あなたは科学界であなたが持っている信頼感を失うのではないですかと言いたいわけです。せっかくこれまで科学者として、みんなから信頼されて、いろんな情報を寄せられ、自分自身も情報を発信し、そうやって科学の世界のジグソーパズルを築いていたのに、そこから外れてしまう、あるいは外されてしまう。そういう危険があるのではないか。僕は、科学者が科学者らしくあるためにはどうすればいいのか、軍事研究にのめり込んでしまうことは、そういう恵まれたポジションを自ら放棄することになるという問いかけをしています。

ですから、今日は申し上げませんでしたでしたが、防衛省の研究に応募するという事は、戦争中に科学動員された、戦時科学者のシステムの再来なのです。つまり、石井が科学者たちを、医学者たちをリクルートして、平房の地に、あるいは南京の地に連れて行き、そこで研究に

役頭させて、人体実験などもやらせたシステムと同様のものを、石井から5、6年たってつくり出したのが、戦時研究員制度です。

その戦時研究員制度を作るために、どういう人が戦時中に研究員になってくれるか、誰が軍事研究に協力的なのかから調べていきます。今の防衛省の補助金は、どのような人が応募してくれたか。次に本当に軍事研究を動員するときに、応じてくれるのはどのような人か、リストを作るためではないかと思っています。そのような意味で僕は、あのような研究に応募するのは、科学界から自分が離れざるを得なくなるかもしれない、お互いに信頼に基づいて研究していたその世界から抜けるかもしれない、ということをしっかり歴史に学び、その上でどうするかを決めてください、と言っています。やめろなどそんな大それたことは僕には言えません。考えて決めましょうねと、思っています。

板倉：ありがとうございます。他に質問はありますか。よろしいですか。時間もだいぶ超過しておりますので、最後にもう一度、上菌先生にごあいさつをいただきます。

上菌：常石先生、今日は誠にありがとうございました。

常石：こちらこそ。

上菌：参加者募集の過程で、途中ちょっと参加者が少ないと焦ったのですが、思ったより多くの方々においでいただき、会場にもおいでいただきました。ありがとうございます。何よりも、常石先生のお話のインパクトが大きかった。科学者、研究者といわれる者が、731部隊のこれだけの事実を知って、それをベースにして今後の自分たちの研究を進めていく、そのための大きな基礎を築いていただいたと思います。どうもありがとうございました。ご参加の皆さんも、どうもありがとうございました。

常石：どうもありがとうございました。

板倉：それではこれで、終わりとさせていただきます。どうもありがとうございました。

— ありがとうございます。

— ありがとうございます。